

# 2024 年度 文化遺産学専攻夏期研修旅行 報告書

2025 年 2 月

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

## 例 言

1. 本書は、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻が2024年度に実施した、夏期研修旅行の報告書である。
2. 夏期研修旅行は、文化遺産学演習Ⅰ（ゼミ）の受講生が参加し、各ゼミ単位で実施した。
3. ゼミの担当教員は、以下のとおりである。  
國下多美樹（文化遺産学専攻教授）・北野信彦（同）・神田雅章（同）・木許 守（同）
4. 研修旅行の実施に際して、以下の機関・各位のほか、多くの方々のご支援を賜りました。記して感謝の意を表します（順不同）。  
中井淳史 氏（兵庫県立大学大学院）・藤本康司 氏（勝山市教育委員会）
5. 本書の編集は、木許の指導のもと、各ゼミから選出された委員により組織した編集委員会が行った。編集委員は、以下のとおりである。  
高橋一馬（木許ゼミ）・昆成 見（神田ゼミ）・池田 天（北野ゼミ）・高垣柚香（國下ゼミ）

## 目 次

I 但馬地域の文化遺産とその活用を考える……………（木許ゼミ） ……	1
II 倉敷、岡山、吉備路の文化遺産を訪ねる……………（神田ゼミ） ……	12
III 文化財科学（北野ゼミ）夏季研修旅行の報告……………（北野ゼミ） ……	23
IV 福井市周辺の遺跡と関連施設の歴史・考古学的踏査……………（國下ゼミ） ……	33

# I 但馬地域の文化遺産とその活用を考える

2024. 8. 08~8. 09

## 但馬地方の文化遺産活用から考えること

担当教員：木許 守

私たちのゼミは兵庫県豊岡市・朝来市を訪れた。豊岡市は、特別天然記念物であるコウノトリの保護増殖、野生復帰事業の拠点である兵庫県立コウノトリの郷公園があることで知られている。また、この施設に隣接して、兵庫県立大学大学院の豊岡ジオ・コウノトリキャンパスが所在しており、地域資源マネジメント研究科がここにおかれている。「地域資源」と「文化遺産」はイメージとしては重なることも多いように思われるが、私はその共通することと異なることは何なのかに興味深く、またそれを「マネジメント」ということは、私たちが文化遺産学専攻において文化財の活用の考えるうえで大いにヒントになるのではないかと考えていた。

実は、文化遺産学専攻2期生であるゼミ生（2020年度卒業）で、卒業後に兵庫県立大学大学院に進学し、いまは大学院も修了したという人がいる。その卒業生が大学院で指導を受けたのが中井敦史先生であった。中井先生は考古学の分野では中世土器の研究者としても著名な方である。私はこれまで面識がなかったにも関わらず、私自身が考古学を専攻してきたという親しみと本学から兵庫県立大学に進学した卒業生の縁をもって、厚かましくも中井先生に但馬地域の地域資源とそのマネジメントをテーマとした特別講義をただけるように依頼した。果たして、先生はこの依頼を快諾くださり、講義後に受講生らの飲食にも同席され、ざっくばらんな交流をしていただいた。

ところで、豊岡には先に挙げたコウノトリの郷公園のほか、山陰海岸ユネスコ世界ジオパークの一部となっている玄武洞公園があり、石柱状になった玄武岩の露頭という見事な自然の造形を見ることができる。兵庫県立大学のいう「地域資源」とは、私の理解では、コウノトリやジオパークのような生態学や地球科学の研究対象となるもので、これに加えて人文学の対象となる文化財あるいは文化遺産を指すのであろう。これらを地域の一体的な「宝」と捉えてそれを地域のなかでどのように活かすかが重要な研究テーマになっているものと受け止めた。これは、やはり発想として文化財の活用と大いに関連することである。中井先生の特別講義は、参加学生らにとっても自らの研究分野が地域の役に立つものであることを実感できる刺激的な時間であったに違いない。

さて、私たちの研修旅行の2日目は、朝食後まずは豊岡市街を歩き、大正14年の北但大地震後の豊岡復興建築群を見学した。その後はマイクロバスを貸し切って、時間の許す限り豊岡市・朝来市の文化財を訪れることとした。そのコースは、玄武洞公園→森尾古墳→池田古墳→茶すり山古墳→古代あさご館→生野銀山と順次見学するものである。車窓からはコウノトリの巣塔や、駐車場から見上げるだけの見学であったが竹田城も望むことができた。

それらを見学しての参加者の感想は次に掲げる通りである。それぞれが特に印象に残った文化財取り上げているが、ここに一定の傾向を見ることができる。

皆が一様に取り上げているのはコウノトリの郷公園と中井先生の講義である。1日目の午後はすべてこれに充てたので時間が長く、学びの幅も広がったものと思われる。2日目では生野銀山が最も印象深かったようで、次いで市街地の復興建築群のことを多くの人が書いている。生野銀山が印象深いのは滞在時間が長かったことが影響しているかもしれない。一方、見学した古墳では、茶すり山を取り上げた人はわずかにいるが、森尾古墳、池田古墳はほとんど取り上げられなかった。

森尾古墳は、小規模な墳丘規模ながら銅鏡や硬玉製品など豊富な副葬品がある前期古墳で、とりわけ出土した正始元年銘の神獣鏡が「卑弥呼の鏡」の可能性があるとされたことで著名である。考古学的には極めて重要な古墳であるが、墳頂部が削平をうけていることもあってか、現地には小さな解説板があるのみで古墳の小さな墳丘は周囲の山林に溶け込んでいた。

池田古墳は墳丘長130mを越える但馬地域では最大級の中期前方後円墳で、近年の発掘調査で多くの水鳥



玄武洞での集合写真

形埴輪が出土したことで話題になった。この古墳は昭和 30 年代に前方部を横切る形で国道のバイパスが建設されることを契機に発掘調査がなされたが、その後の措置として古墳を削り取るのではなく、長さ 120m の墳丘を跨ぐ鉄橋が造られて、これにより墳丘が保存されたことで著名な古墳であった。ところが 2010 年ごろまでに鉄橋の老朽化、騒音、振動が問題になり、この鉄橋を撤去し代わって盛土工法によって改めて道路建設する方針が定められた。水鳥形埴輪などが出土した発掘調査はこの工事に先立って行われたものである。池田古墳は、その歴史的意義にもまして文化財保存の問題を考える際に非常に重要な古墳である。

それにも関わらず、参加者にとって、それらの古墳の印象が弱かったのは、整備という形で遺跡の価値が顕在化していないためではないだろうか。同じ古墳でも茶すり山古墳について感想を述べている人がいるのは整備されていることがその違いとして考えられる。この整備という観点からみたときに、生野銀山は観光活用の側面が強いはと思うが、長い坑道を歩くことができ、人形による作業状態の展示など一定の「インパクト」を持っていた。こうした整備の違いが与えている文化財に対する印象の違いを冷静に考えれば、文化財の保存と活用を結ぶ整備の重要性がより一層意識されるものと思う。皆の感想文を読みながら、このようなことを考えた。

末筆ながら、ご多忙にもかかわらず特別講義をいただいた兵庫県立大学大学院 中井敦史先生には改めて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

### 豊岡市を訪れて：黄筱

今回の夏期研修旅行では、8月8日と8月9日に豊岡市を訪れて、地域文化財の保護と活用についての理解を深めることができた。

初日に訪れたのは兵庫県立コウノトリの郷公園内の豊岡市立コウノトリ文化館と、兵庫県立大学である。大学では中井淳史先生の「地域資源」に関する特別講義を受けた。講義では、地域資源の定義から始まり、豊岡市における代表的な地域資源である「コウノトリ」、山陰海岸ジオパーク、そして地域の古民家についての幅広い紹介が行われた。

特にコウノトリについての話は興味深かった。コウノトリはかつて絶滅の危機に瀕しながら、野生復帰に成功した。この鳥は元々は田植えを妨げる存在として駆除され、その卵も食されていたが、今では豊岡市において絶滅前の最後の生息地として、地域のシンボルとして大切にされている。地域資源とは、そのように価値が再認識され、保護および活用されるものであることを改めて理解することができた。

次の日に、まず朝は豊岡市街地を歩き、震災復興建築群を観察する機会があった。この建築群は、過去の大地震の後に建設されたものであり、地域の歴史と復興の努力を物語っている。豊岡市の駅まわりの市の中心部を通る大通り沿いに位置するこれらの建物は、地震に強い構造を持っており、歴史的価値も高いため、文化財として保護する価値が高いと感じた。特に、震災後の復興を象徴する鉄筋コンクリート造の建築群は、その後の市街地の発展に大きく寄与している。これらの建築物は、市の発展において中心的な役割を果たし、地域住民の安全と生活の向上に貢献している。また、これらの建物は豊岡市の文化的景観の一部として、観光の観点からも非常に重要である。このように、豊岡市街地の震災復興建築群を通じて、文化財保護の実践的な側面とその重要性を学ぶことができた。地域のアイデンティティを形成し、歴史を伝える建築物の保護は、未来世代への教育資源としても価値があると感じている。

2日目の活動の中に生野銀山での見学が一番印象深かった。生野銀山の訪問では、鉱山がどのように運営されていたか、具体的に坑道内部の見学施設を通じて体験することができた。坑道には昔の鉱夫「下財」たちが使用していた道具や作業風景が再現されており、訪問者にその時代の鉱山作業の実際を生々しく伝えている。このような展示は、文化財保護の一環として、産業遺産の価値を教育的かつ視覚的に示す重要な方法である。生野銀山ではその歴史的な背景だけでなく、技術的な進展や社会経済に与えた影響も包括的に解釈し、保存している。このような包括的な取り組みは、産業遺産を過去の生活や技術、経済活動の生きた教材として活用することを可能にしている。さらに、現場での具体的な展示は、文化財としての価値を伝えるためのストーリーテリングの手法を取り入れており、来訪者に対して教育的な効果がある。

また、この坑道内部の展示は、過去の産業活動が現代の環境や地域社会にどのような影響を与えているか



JA たじま 壁面に描かれたコウノトリ

を理解する上で、貴重な学習の場を提供している。文化財保護の実践として、これらの活動は地域の歴史とアイデンティティを保持し、後世に伝えるための重要な役割を担っている。

今回の研修を通じて、文化財保護が単に遺物を保存することだけでなく、地域の自然や歴史と密接に関連していることを理解することができた。各訪問地で得られた知見は、今後の学問的探求に大いに役立つと感じている。

### 夏季研修旅行報告文：工藤麗奈

我々は、8月8日から9日にかけての研修旅行で兵庫県の但馬地域を訪れ、但馬地域の文化遺産の活用について考えた。但馬地域の中心地である豊岡市は、兵庫県の北部に位置する市で、平成17年4月1日に1市5町が合併してできた。北は日本海、東は京都府に接し、中央部には円山川が流れている。海岸部は山陰海岸国立公園、山間部は氷ノ山 後那岐山国定公園に指定され、多彩な自然環境に恵まれている。

1日目に訪れたのは、豊岡市立コウノトリ文化館である。コウノトリ文化館は、人と自然の共生を目指し、国の特別天然記念物であるコウノトリの保護と野生復帰に取り組む施設で、兵庫県立コウノトリの郷公園内にある。施設では、飼育コウノトリを観察しながら、係の方の豊岡とコウノトリの歴史やコウノトリの生態の解説を聞いた。ヒナの一日の食べる量は親の倍もあるということや、つがいは基本変えないといったことが大変興味深かった。また、コウノトリの生態に関してのみではなく、コウノトリの野生復帰のために地域住民が行っている取り組みや豊岡の地理的特徴・自然環境、豊岡に生息する哺乳類や鳥類、魚類に関してパネル解説や、図書、剥製などの多彩な資料から学ぶことができた。専門家だけでなく地域の人々の手によってコウノトリが大切にされていることがわかり、コウノトリが地域のアイデンティティを形成していることが実感できた。文化遺産が地域の人々の手によって守



生野銀山 坑道入口

られている例を学習でき、有意義であった。施設の見学後は中井淳史氏の講義を受講し、地域資源とは何かということや、地域資源の重要性について学んだ。地域資源を見つけるには地域の人々の様々な記憶を読み取るということが重要で、そこには経済、産業、文化、歴史などといった要素が相互に複雑に絡み合っているということがわかり、「地域活性化」を考えるためには一つの学問に偏重することなく複数の学問からの幅広い視点が必要だと感じた。

2日目は、豊岡市街地を歩いた後、玄武洞、森尾古墳、池田古墳、茶すり山古墳、竹田城跡、生野銀山を訪れた。ここでは、特に印象に残った生野銀山について述べる。最初訪れた資料館は江戸時代の銀山の様子を描いた絵巻物や採掘に使われた道具が展示されていたが、館内は空調が管理されておらず展示ケースに虫が入り込んでおり、果たして展示物にとってよい環境だったのか気になった。次に鉱道を実際に歩いたが、採掘跡や採掘の様子を伝える鉱員の人形の展示によって当時の鉱道の様子を肌で体感できる、わかりやすい展示だったと思う。銀山ボーイズに関しても、我々と鉱員の距離を縮めてくれる存在で、文化遺産に親しみを感じさせてくれる存在として良かったと思う。

最後に、但馬地域の文化遺産を見学して、地域の人々が地域に誇りを持つには、歴史、自然といった様々な観点から地域の特徴を理解することが大切であるが、但馬地域では豊かな自然環境と文化遺産が連携して地域の魅力を伝えており、文化遺産の活用の例として大変有意義な学習ができた。今後再び但馬地域を訪れたいと感じた。

### ゼミ研修旅行レポート：高橋一馬

文化財行政ゼミの夏期研修旅行は但馬地域の文化遺産とその活用を考えるという目的のもと、兵庫県豊岡市を訪れた。

1日目はコウノトリの郷公園を訪れ、コウノトリ文化館を見学した。豊岡市立コウノトリ文化館はコウノトリの保護と繁殖を目指す施設である。館内にはコウノトリの生態や歴史を学べる展示があり、来訪者が自然環境の大切さを理解するための教育活動が行われていた。コウノトリについて学んだことの中で個人的に驚いたり関心を持ったことについて述べる。まず、コウノトリは雄雌の区別が外見をただただでは区別が付きにくいということである。またクラッタリングというクチバシをカタカタさせて音をたてるということであった。そしてコウノトリは雛では1日1kgのえさを食べるということに驚いた。コウノトリは虫などだけではなく蛇やモグラなどといった大きな生き物を食べるということであった。豊岡市の各地にコウノトリ用

の人工巣塔がたてられていた。そこでは実際にコウノトリが生活していた場面を観察することができた。今回の見学ではどのようにしてコウノトリを保護しているかだけでなく、どのようにして野生で生活できるかということについても知ることができた。

その後私たちは兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科を訪問し、中井淳史先生の特別講義を受講した。地域マネジメント研究科は「地域に内在する自然、社会、文化のつながりを科学的に解明し本質的に理解する素養を身につけ、地域資源の発掘、保全、活用を実行できる人材の育成」を目的としているとあった。講義では地域資源を手掛かりに「大地、自然、人間のつながり」について考えられてきたことについて言及されていた。地域の「宝」の保全や活用についてさまざまな視点から見る大切であるということなどを学ぶことができた。

2 日目はバスに乗って豊岡市の様々な遺跡、施設を見学した。その中で特に印象に残った場所を紹介する。

まず初めに挙げるのは玄武洞である。玄武洞は 160 万年前行われた火山活動により山頂から流れ出したマグマが冷えて固まるときに作り出された規則正しいきれいな割れ目である。写真で見るとはるかに壮大で見る価値があると考えた場所であった。昔の人々は玄武洞の石に価値を見出すことがなく漬物石として利用していたということに驚いた。そこから文化財として活用されるものには何かのきっかけがないと重要な価値として見出されないのだということを感じるこ



玄武洞の様子

ができた。

次にあげるのは生野銀山である。私は卒業研究として佐渡金山を調べている。そのうえでの今回の見学であったので私は佐渡金山と比較することを念頭において見てきた。生野銀山の坑道では様々な展示の工夫がなされていた。特に印象に残ったのは坑道に配置されていた当時の人々を表した人形である。人形の服装から扱っている器具においてまで細かく再現されていた。この人形による展示は佐渡金山においても行われている。このことから鉱山の遺跡において人形を用いて当時の様子を再現するということは見学者にとってわかりやすいものであると考えることができた。また坑道内の一年中を通して一定の気温であるという特徴を活用して酒を熟成させるという活用方法が目にとまった。鉱山の活用の幅広さを実感した見学であった。

今回の旅行において地域の文化財の様々な活用方法について知り、考えることができた大変有意義なものであった。

### 夏季研修旅行の報告書：出島奨

私が所属しているゼミでは、兵庫県豊岡市及び朝来市を訪れ、現地の文化財の保存活用について勉強してきた。以下、研修旅行に参加して印象に残ったことや考えたことを述べていきたい。

1 日目に訪れたコウノトリの郷公園では、国の天然記念物であるコウノトリの生態を間近で観察することができた。私たちが着いた頃に丁度コウノトリについての説明が始まり、タイミングが良かったと感じる。専門的な解説を聞きながらコウノトリを観察することができ、とても興味深かった。またその後、隣接している兵庫県立大学大学院のキャンパスで、中井淳史先生の「豊岡の文化遺産と地域資源マネジメント」と題した特別講義を拝聴することができた。数々のお話の中で特に興味深かったのが、文化財から様々なことを読み解けるというお話である。例として、平尾家住宅から発見された掛け軸からは、伊藤博文が書いたことから立憲政友会との繋がりが判明するなど、ただ単に貴重であるとかではなく、その家(もしくは人物)の政治的思想などの考え方も分かるのがとても興味深いと感じた。

また、2 日目に訪れた豊岡の市街地も印象に残っている。昔の雰囲気を感じられる建築物がいくつか残っており、とても貴重なものを見ることができたと思う。しかしそう感じるのは、普段豊岡に住んでいない外部から来た人間だからだろう。先生も仰っていたが、普段住んでいる地元住民がどこまで希少価値が高いと思っているのか、後世に残したいと思っているかは正直分からない。豊岡に限らず、文化財は地元の人が保存

運動を起こさない限り、後世まで保存するのはなかなか難しいことだろう。

もう一つ、2日目に訪れた場所で印象に残っているのは生野銀山である。銀山として現役だった当時の様子を伺い知ることができた。併設されていた資料館に写真や模型、当時使われていた用具などが展示されていたことが、銀山への理解を深めた事は間違いないのだが、なによりも銀山内部の充実した展示が更なる理解を促していたと感じる。模型などを置いていたことで、当時はこのように銀山で仕事をしていたのだと、想像しやすい作りになっていると感じた。また、ボタンを押すことで銀山の爆発体感ができるなどの、老若男女問わず楽しめる要素があり、いわゆる観光資源として活用できる施設にもなっていた。生野銀山の歴史についてもしっかりと触れて、当時について学習できる施設となっているだけでなく、観光資源としてのポテンシャルも持っており、文化財の保存・活用という点において、見習うべきところがたくさんあると感じた。しかし、一つ残念だったのは、「GINZAN BOYS」という、生野銀山のマネキン地下アイドルの存在である。せっかく歴史的なことを踏まえつつ観光資源としても活用することに成功しているのに、これらの存在は浮いているように感じた。特に銀山の中で「GINZAN BOYS」の楽曲が流れている場所があったのだが、悪い意味で異質な感じがした。

まとめると、非常に有意義な2日間を過ごすことができた。研修旅行で発見した文化財活用のよい事例は、



トラス構造が見られる「ふれあい公設市場」

今後のゼミでの研究にも繋がっていきだろうと感じた。

### 夏季研修旅行報告文：箭野颯真

豊岡市立コウノトリ文化館では、コウノトリについての解説やコウノトリを含め他にもたくさんの生物の剥製が展示されていた。コウノトリとは、体長約 1.1 m、体重 5 kgで、翼を開いたときの大きさは約 2mにもなる鳥である。白い体に黒い風切羽で、長いくちばしをもつ。目の周りと下くちばしの付け根と足は赤くなっている。現在の世界での生息数はおよそ 3000 羽となっている。コウノトリはかつては日本各地で見られていたが、生息環境の悪化とともに数を減らし、1971年以降は、豊岡市で最後の1羽が保護されて、日本の空から消えた。豊岡では、1965年から人工飼育に取り組んでおり、長い苦難の末に飼育下での繁殖に成功し、2005年9月に5羽のコウノトリが放鳥された。以来、野外での繁殖は順調に進み、豊岡市以外での繁殖地も増えてきている。

それではコウノトリはどのように繁殖するのか。まずしなければいけないことは巣づくりである。冬になると、人工巣塔の上に木の枝を集め、枯草を敷き、直径2mの大きな巣を作る。そして2~3月頃、一日おきに計4個程度の卵を産み、親鳥は交替で温める。その後約1か月すると、ヒナは殻を割って出てくるのである。そこから約2か月間、親鳥は交替でエサを運び、飲み込んだエサを吐き出してヒナに与える。ヒナは成長すると、親鳥の2倍ものエサをたいらげる。これを



コウノトリの剥製

育雛という。最後に巣の上でジャンプを繰り返して飛行訓練をし、やがて風に乗って巣立っていくのだ。巣立ちしてからも、しばらくの間は親鳥と一緒に過ごし、エサをもらいながらひとり立ちしていく。コウノトリは生態系の頂点に立つ鳥であり、春、水を張った田んぼではオタマジャクシやカエル、稲が実る頃にはバッタやイナゴやアカトンボ、時にはネズミやモグラなどの小型哺乳類やヘビなども食べるほど大食漢である。口に入る大きさの生き物なら何でも食べると言われており、1mを超えるようなヘビでも丸のみしてしまう。エサが少なくなる冬には、泥の中で越冬するドジョウ、ザリガニなどを探して過ごす。

コウノトリには、オスとメスの外見上の違いがほとんどなく、唯一あるとすればオスの方が若干大きいということぐらいで、正確に判断するためには羽や血液を採取してDNA鑑定をする必要がある。また、昔コウノトリは人々に鶴と呼ばれていた。日本画にも題名に鶴が入っているものがあるが、その絵では高い木の上に止まっており、鶴は木の枝に止まれないため、実際はコウノトリのことだったと言われている。コウノトリと鶴の違いは鳴声である。鶴は大きく甲高い鳴き声なのに対し、コウノトリは鳴かない。身体の成長に対して、あまり発声器官が発達しないため、身体が大きくなると鳴きづらくなるからである。その代わり、くちばしをカスターネットのように叩いて音を出す、「クラタリング」という方法でコミュニケーションをとる。これがコウノトリと鶴の明確な違いである。また、コウノトリが日本に定着したのは、カエルなどエサとなる生物が多くいる田んぼがたくさんあり、育雛しやすい環境だったからだと考えられている。

## 但馬地域の多様な文化財に触れて考えたこと

：中村京香

今回の夏期研修旅行で兵庫県豊岡市・朝来市を訪れ、但馬地域にある多様な文化遺産に触れることができた。そして、但馬地域の文化遺産とその人々の関わりについてうかがえたり、保存・活用の在り方について考えを深められたりした非常に有意義な2日間を過ごすことができた。

1日目は豊岡市立コウノトリ文化館にて館内の展示や本物のコウノトリを見学したり、解説員の方からお話をうかがったりした。特にコウノトリのヒナが生まれたことを喜んだり、えさ代が不足した際には但馬コウノトリ保存会が寄金を募ったりしたこと等豊岡の人々のコウノトリへの愛着や守り伝えたいという強い思いが感じ取れた。また、コウノトリを野生に放鳥することだけがゴールではなく、コウノトリと人間が共存できる自然環境を目指した持続的な保存・活用の取

組に力を入れられていることが印象的であった。その後、中井淳史先生にご講義いただいた。玄武洞をはじめ、あらゆる文化遺産は今日までに地域の人々がそれぞれの生活の中で様々な関わりをもっており、それらの持つ価値は非常に多様なものであることを再確認した。また、文化遺産含めあらゆる事物は、エコ・ジオ・ソシオという3つの要素が歯車のように絡み合い、繋がっていることを学んだ。また、平尾家が所蔵する掛け軸等の多くの美術品から但馬地域とのかかわりについて知ることができた。一方でこのように但馬地域と密接な関わりがうかがえる平尾家の宝物を今後どのように保存・活用していくかが課題であると痛感した。

2日目は、まず豊岡市街地を歩き、そこに残る北但大地震後に建てられた豊岡復興建築群を見て回った。これらの建築群はレトロな外観も持つことから市街地に溶け込み、趣のある街並みを形成していた。また、建築背景を踏まえ、鉄筋コンクリート造・トラス構造といった耐震構造を持つ建築群を見て地震に負けず、街を復興していこうという当時の地域の人々の強い思いを感じ取れた。そして地震やその後の復興のために奮闘した地域の人々の記憶を語り継いでいくためにもこの建築群の継承の必要性を感じた。

その後、玄武洞や森尾古墳、池田古墳、茶すり山古墳、古代あさご館、竹田城跡、生野銀山を訪れた。その中で特に茶すり山古墳が印象に残っている。その理由として様々な手法を用いて古墳が復元されている点が面白いと感じたからである。ここでは、古墳の斜面の葺石や古墳に復元された円筒埴輪や朝顔形埴輪を見ることができた。また、第1埋葬施設では復元された埋葬施設と副葬品等がガラスケースから見ることができたり、第2埋葬施設では埋葬施設とその副葬品が陶板に復元されていたりした。そして、葺石、埴輪についての説明やそれぞれの埋葬施設内の様子を示した図が掲載された解説板がそれぞれ立てられていた。さらに茶すり山古墳学習館があり、パネル展示によって歴史や整備・活用等について理解を深められる施設とな



茶すり山古墳墳頂部の様子

っていた。しかし、復元埴輪のなかには割れたものがあったり、雑草が生えて葺石が見にくくなっていたりするなど保存・活用の現状から課題も見出せた。

この研修旅行では、事前に訪れる文化財の歴史的な背景やそれらの保存・活用のための取組等について学習する機会があり、当日はそれらを踏まえた上で見学することができたので、現地ですべて学習した内容を再確認するだけでなく、自身で考えを深め、新たな発見を得ることができた。

### ゼミ旅行について：張海鵬

今回のゼミ旅行は2024年8月8日と9日に兵庫県豊岡市・朝来市で行われた。コウノトリ文化館や震災復興建築群、生野銀山などの文化財を訪れ、この地の歴史や文化に深く触れることができた。

初日はコウノトリ文化館の見学から始まった。コウノトリ文化館は、国の特別天然記念物であるコウノトリの保護と繁殖をしている。この施設は、コウノトリに関する知識を広め、自然環境の重要性を啓発することを目的としている。解説を担当する特別スタッフがあり、コウノトリを観察することもできる。文化館を訪れたことで、私はコウノトリが日本で一時絶滅した経緯と、復活に成功し保護された過程を学ぶことができた。次に、中井淳史教授の特別講義を受講した。この講義では、コウノトリ野生復帰事業、平尾家が但馬地域の大地所有者であった歴史などを学んだ。また、地域資源の「重層性」についても学び、「地域資源」とは何かを新たに理解することができた。

翌日はまずホテルの近くにある震災復興建築群を見学した。震災復興建築群は、1925年（大正14年）に発生した北但大震災の後に建設されたもので、大開通り（JR豊岡駅前通り）を中心に多くの鉄筋コンクリート造の建物が再建された。震災復興建築群は、震災復興の歴史を伝える施設として、地域にとって大きな価値がある。復興の痕跡から、震災後の復興に向けた当時の人々の努力を感じることができる。



生野銀山 人形による作業風景の展示

その後、生野銀山を見学した。ここも今回の旅行で最も印象に残った場所であった。この地は戦国時代の英雄、信長、秀吉、家康の直轄地であった。生野銀山では807年（大同2年）に銀が出たともいわれるが、室町時代の1542年（天文11年）、但馬守護職の山名祐豊が銀石を掘り出したのにより開鉱したとされる。1868年（明治元年）、銀山は日本初の官営鉱山となった。明治政府はフランス人技師ジャン・フランソワ・コアニエを鉱山師兼鉱学教師として雇った。生野銀山には現在もフランス人の銅像があり、ジャン・フランソワ・コアニエが生野銀山の鉱山事業に大きく貢献したことが分かる。鉱山は1896年に三菱合資会社に売却され、1973年（昭和48年）に閉山、1974年（昭和49年）に生野銀山の史跡が観光施設として開放された。生野銀山の最大の見どころは、本物の坑道を通り、坑道の内部を間近に見学できることである。坑道内の温度は非常に低く、坑道外の気温が30度を超えていても、坑道内の温度は体感できるほど低い。そして、坑道の奥に進むにつれて、温度は徐々に下がっていく。坑道内には鉱夫が使っていた道具や機械が展示されているほか、リアルな人形が設置され、労働環境を再現・紹介している。

また、坑道内にはかつての鉱脈や採掘作業の跡が残っており、見学しながら鉱山の歴史や重要性を感じることができる。史跡内には生野銀山資料館もある。銀山の歴史や技術、そこで働いていた人々の生活などが紹介されている。江戸時代から明治時代にかけての銀山の歴史や、採掘技術の変遷が詳しく説明されている。銀山で使われていた採掘方法や精錬技術などを見ることで、当時の鉱夫たちの生活について理解を深めることができた。

この2日間のゼミ旅行を通して、私は但馬地域の歴史と文化を知ることができた。また、自然資源や史跡を保護するための地域の取り組みを実際に見聞することもできた。これらの貴重な経験は、私の視野を広げただけでなく、文化遺産保護の重要性をより深く理解させてくれた。この旅行を通して、私は貴重な知識と忘れられない思い出を得ることができた。今回見聞きしたことは、今後の学習や生活において貴重な財産となるだろう。

### 夏季研修旅行を通して学んだこと

：長谷川咲

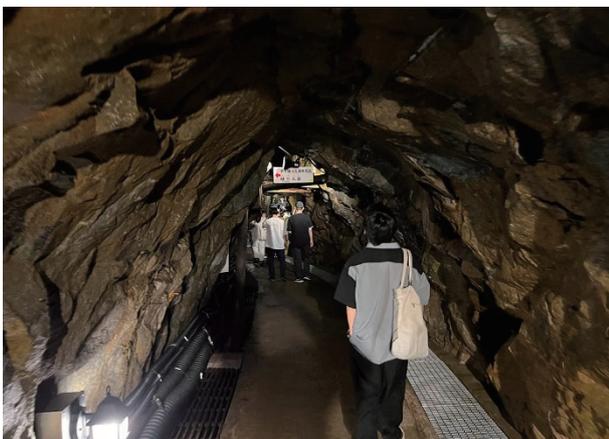
今回夏季研修旅行として、兵庫県の但馬地域を中心に訪れ、そこでいくつかの文化遺産を見学した。それらの地域との関わり方や活用の現状について学んだことや考えたことをここで述べたい。

豊岡市は野生のコウノトリの日本最後の生息地と

して知られ、現在もコウノトリの保護活動や野生復帰事業が行われている。今回の見学でその様子を見学することができた。その取り組みの一つとして町の様々なところに人工巣塔を見ることができる。実際に巣塔で休むコウノトリを観ることができたのはとても嬉しかった。また豊岡市立コウノトリ文化館では、コウノトリと豊岡の歴史などを学んだ。農薬の使用を減らしたり、ビオトープといった生物が住みやすい環境づくりを行うなど豊岡の自然と共生できるような取組が行われていることが分かった。コウノトリが日本で一度絶滅したということを考えると、この地でコウノトリが再び生き残ることができたのは、地域の人々のひたむきな姿勢があったからであると再確認した。また豊岡の人々にとってコウノトリは身近な生き物であり、ともに暮らす大切な存在であることを実感することができた。

その他にも玄武洞や生野銀山といった貴重な遺産を訪れた。玄武洞では自然が作り出した造形に、生野銀山では当時の近代化へと進もうとする人々の営みに圧倒された。そして私は生野銀山のような坑道を実際に見たことがなかったため、その広さにとっても驚いた。内部では当時使われていた機械や採掘跡がそのままの姿で見ることができたり、採掘の様子を再現した人形が多く設置されていたりと、当時の様子がよく伝わるいい展示だと思った。

また今回の夏季研修旅行では中井淳史先生から話を聞かせていただく機会があった。講義を通じて、これから今回夏季研修旅行で訪れた玄武洞や、豊岡のコウノトリが「地域資源」としての働きを持つまでにはどのようなプロセスがあるのか学ぶことができた。資源とは、少しでもその中に価値を見出すことができるものである。地域の存在する様々なモノを、人々がどのように捉え価値を見出すかによって資源化の在り方も変化することがわかった。そしてそれらがお金にならずとも、地域の人々にとっては大きな存在意義を持つ場合があることを理解しなければならなかった。



生野銀山 坑道内の様子

またその文化遺産自体がどのような形で必要とされてきたのかを、資源化の軌跡をたどることで探ることができると考えた。

今回の夏季研修旅行を通して、但馬地域には豊かな文化があり、様々な活用の形があることを知ることができた。また中井先生の講義は、文化財行政を学ぶ立場として貴重な話を聞くことができ、「地域資源」について改めて考える機会となった。今後もこの夏季研修旅行で知ることのできた地域の取組やそれに伴う課題を、これからの学びに活かしていけたらと思う。一泊二日と短い期間であったが、有意義な旅行になったと思う。

## 但馬地域の文化遺産を通して考えたこと

### ：馬場菜摘

文化財行政ゼミでの夏期研修旅行では、豊岡市と朝来市の文化遺産、自然遺産を訪れ、兵庫県立大学大学院の地域マネジメント研究科の中井淳史先生の特別講義まで受講することができた。1泊2日という短い期間であったが、事前に訪れた文化遺産と自然遺産について勉強していたこともあり、非常に有意義な時間をすごせたと思う。その中でも特に個人的に印象に残ったことや考えたことを記すこととする。

1日目はまずコウノトリの郷公園にあるコウノトリ文化館を訪れた。特別天然記念物かつ絶滅危惧種であるコウノトリの生態や歴史、保護や繁殖など、コウノトリについて詳しく展示しており、その他にも豊岡の自然環境や動物についても詳しく知ることができる場所であった。このコウノトリの郷公園では、コウノトリの野生復帰事業を展開しており、平成17年(2005)から但馬地域を中心に全国にコウノトリの野生の姿が見られるようになってきているという。実際に1日目には2羽のコウノトリを、施設の中から見ることができ、2日目には人工巣塔にいるコウノトリをバスの中からではあるが、見ることもできた。なかなか見ることのできないコウノトリに私は感動し、見られてよ



コウノトリ文化館で見たコウノトリ

かったと心の底から思った。

さらに、中井先生の話では、人と自然、大地の3つが互いに絡まり合ってお互いに影響し合っていること、単体ではなくそれらの繋がりが大切だということや、昔コウノトリはイネを踏み倒すことなどが原因で、農家の方たちから嫌われていたことなど多くのことを聞くことができた。

これらのことから、コウノトリはただ飼育されているのではなく、豊岡の人びとと共に生き、暮らしていることがわかった。コウノトリが生きるには、その地域の環境が非常に重要だという。地域の人々がコウノトリを理解してコウノトリに歩み寄る姿勢も重要であり、これができているからこそコウノトリの野生復帰は順調に進んでおり、コウノトリの増加に繋がっているのだろうと思った。豊岡といえばコウノトリ、というようにコウノトリは豊岡のいわばアイデンティティであり、豊岡の人びとにとっての誇りや豊岡への愛着に繋がっているのだろうと私は考えた。2日目の豊岡駅周辺を街歩きしたときにコウノトリのイラストを多く見かけ、コウノトリが豊岡の支えになっていることを実感した。

また、中井先生の講義の中では、江戸時代の庄屋であり、大地主であった平尾家についても教えていただいた。平尾家住宅主屋は登録有形文化財にも登録されており、中井先生によると500点にも及ぶ掛け軸や多数の芸術品、著名な人物の書跡など、平尾家は歴史的な価値をもつ遺産を多数所有しているという。私は、平尾家の今の当主の方は自分の家が貴重な遺産を所有している現状をどう思っているのか、中井先生に質問した。先生からは、当主の方は退職の後、豊岡に戻ってきて暮らしており、それらを個人で所有しているため大きく公開することなどはできず、継承という点で課題を抱えている、という回答をいただいた。

文化遺産を所有する本人はもちろんのこと、どこの地域であれ、文化遺産であれ、なにかしらの課題を抱えており、解決するには難しい現状がある場合もあることを実感した。

大学で学んでいた文化遺産を活用する、ということを実際に現地に足を運んで、自分の目で見て、話を聞いてその場で考えるということの大切さをこの夏期研修旅行を通して改めて実感することができた。これからも実際に文化遺産を訪れて考える、ということを実感していきたい。

## 豊岡市の地域資源マネジメントについて

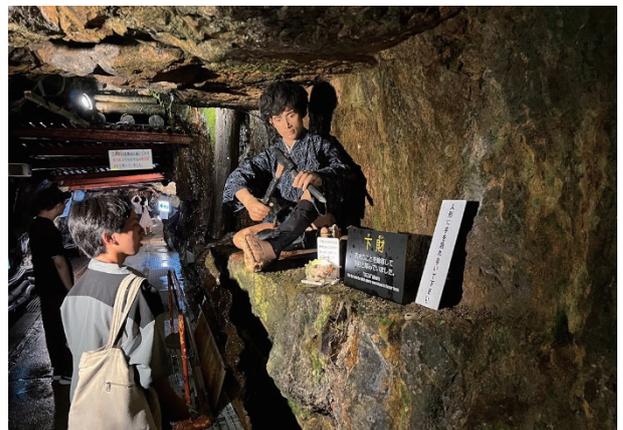
：梅津幸太郎

8月8日から9日にかけて行った夏期研修旅行の見学先の中で強く印象に残ったのは、豊岡市立コウノト

リ文化館および、そこに隣接する兵庫県立大学で受けた中井淳史先生の特別講義についてである。そこではコウノトリなどの豊岡市の文化財だけでなく、文化財やその保存、活用にも関わる地域資源マネジメントという考え方を学ぶことができた。

豊岡市立コウノトリ文化館では、その種の特徴や生態、現在までの繁殖への取り組みなどが、パネルや映像などの資料で数多く展示されており、コウノトリを天然記念物としての観点だけではなく、豊岡市の歴史や特色と深い関わりを持った重要な地域資源であるということを学ぶことができた。

中井淳史先生の特別講義の内容は主に、地域資源とは何かということと、地域資源の発掘、地域資源化を行うという地域資源マネジメントという研究についてであった。自分らが研究するのは主に文化財であり、一見すると地域資源の研究との区別が曖昧なように感じたが、特別講義を受けたことで、文化財と地域資源はその扱われ方について共通点があるのではないかと感じた。講義中で地域資源とは「何らかの有用性を含む価値であり、目的がなければ資源化もなされない」とされた。私たちがそのことを知らないまま地域資源という言葉聞いた場合、その価値は経済的、観光的なものとして考えられやすいのではないかと感じた。私たちが研究する文化財において、近年、観光活用が促されるのも、文化財という言葉に経済的な価値の面が重視されがちだからなのではないかと思う。中井先生は記憶という言葉を使い、地域資源の人や社会集団の心の支え、拠り所としての価値について述べられた。また、地域資源を特定のものではなく、ソシオ（人）、エコ（自然）、ジオ（大地）の3つのつながりの中で歯車のように異なる大きさと作用することで生まれ、それらを地域社会及びそこに属する人が見出すことで、あらゆるものが地域資源となりうることも述べられた。このことも、文化財と重なる部分があるのではないか。行政や政府の文化財活用の問題点は、中井先生が言われるような価値観、考え方がないからこそ起こってし



生野銀山 人形による作業風景の展示

まうのではないかと感じた。

今回の夏期研修旅行で巡った史跡などにおいても、そういった地域の人の拠り所としての価値を感じるところが多くあった。豊岡市街地に位置する鉄筋コンクリート造りの建築群は北但大地震及び火災、その後の復興という豊岡市の歴史を感じさせるものであり、生野銀山では坑道だけでなく、当時、そこで労働に従事していた人たちの様子などを再現して展示することで史跡と人との関わりを感じることができた。文化財と地域資源には概念規定に相違点もみられるが、どちらにおいても観光活用、経済的価値という画一的な価値観で測るのではなく、それらが有する歴史性、地域及び人との関わりからくる本質的な価値を現在の私たちが見出し、それらを後世に伝えるための活用をしていくべきなのではないかと感じた。

### 夏期研修旅行研究報告文：廣橋真於

今回、兵庫県立大学で中井淳史先生の講義を受講することで考えることが多くあった。具体的には、「地域資源マネジメント」という観点から文化財に対してアプローチするという、また、その考え方について学んだ。

まず、「資源」という言葉には、目的の有無が含まれる。資源は何らかの有用性を含みそれは、個人的及び社会的な価値を与えることが出来る。その中でも「地域資源」とは、ソシオ（人）・エコ（自然）・ジオ（大地）の三者の相関性がそれぞれに多大な影響をもたらすことがあり、すべてが絡み合い関り合っている。しかし、その三者が共有する時間は、価値や量、大きさが異なり、大地や自然の育んできた時間と、一人の人間が育むことが出来る時間は異なる。

しかし、人間には「記憶」というものが存在し、人間はその記憶を後世に伝え、「知」を受け次いでいくことが出来る。人間という社会集団が持つ記憶は、「依代」を求める。記憶の具体化には、記憶の形式化が必要不可欠であり、大地や自然との相対が必要となる。

地域資源マネジメントについて、コウノトリ野生復帰事業を例に考えてみる。コウノトリとは、全長約1.3m、両翼を広げると2.2mにもなる大型の肉食鳥である。コウノトリが絶滅してから、ロシアからコウノトリを輸入し、2005年に再放鳥し、コウノトリの野生復帰が目指されている。2022年には個体数は400羽程度まで増加した。豊岡地域におけるコウノトリは、まれに食用として利用されることはあったものの、戦前には観光資源として利用されるなど親しまれた鳥であった。しかし、稲を踏み荒らす害鳥として、駆除され徐々に数を減らしていった過去をもつ。そのようなコウノトリであったが、地域の人々にとっては、シンボルで

ある。そのようなコウノトリを地域資源として活用する、一文化財として活用が行われているように感じた。

それらを踏まえたうえでの地域資源の重要性は、過去の人々が持つ「まなざし」、改変・利用の「価値」の集積が未来へと繋がる。そして、「誰が」「何を」「誰に対して」「どのように」資源化するのかという視点が重要となってくる。また、観光資源化がすべてではなく、地域のアイデンティティまでも資源化することが出来る。「地域資源マネジメント」と「文化遺産」といった一見かけ離れたように見える分野ですらも一つ大きく広げて考える事で、両者同じように、資源にどのような目的・意味を求め、何を期待するのか、そしてその資源がどのような役割を有するのか考える事が出来る。

これを踏まえて考えてみると、私は、今までであれば、対象とする文化財のその中身及び表面をみることのみであった。しかし、地域住民や地域との関係性、また地域の特性に観点を当ててみると、但馬地域と同様にその地域独特の特性や、関係をもっていることが分かる。

中井淳史先生の特別講義を受講して、卒業論文に繋がる、文化遺産についての研究を進めていく中でのもう一つの観点に関して、新しい知見を得ることができたと思う。一つの文化財を歴史など一つの観点からだけではなく、その地域の特性、その文化財の持つ価値の資源化など様々な視点や観点から対象文化財について考えていきたい。

### 夏季研修旅行報告文：諫本凌太郎

2024年8月8日から9日にかけて行われた夏季研修旅行「但馬地域の文化遺産とその活用を考える」に参加し、但馬地域の文化遺産を訪問した。

まず、1日目は豊岡市立コウノトリ文化館を見学した。コウノトリは田圃に入って稲を踏み荒らすため農家からは嫌われていたという話を聞いたが、それでも保護が実現している理由は地域住民がコウノトリを保護しようという意識を持っているからであり、コウノトリの保護は地域住民の保護意識によって成り立っているということが分かった。

他の文化財でも同じように、持続的な保存を実現するには周囲の人々が保護意識を持つことが必要であると思った。

2日目の朝は豊岡復興建築群を見学した。これらの建築群は大正時代のもので、このように一か所に集中して建てられることで一つの街並みを形成しているのは全国的にも珍しい例であるが、多くは民間の所有であり、文化財としての指定も受けていないため、十分な保全措置が取られているとは言い難い状況である。現に昭和後半以降に建て替えられて商業ビルなどにな

っている場所も見られ、景観が変容しつつあると感じた。

豊岡稽古堂や旧兵庫県農耕銀行ビルのように比較的規模の大きいものは交流センターやホテル、ウェディング会場として活用されているが、個人経営の店舗のように小規模なものは活用が難しいため、活用の方法について検討されるべきだと感じた。

豊岡で見られるような規模の小さい近代建築は京都にも多く存在するが、多くが個人の所有で文化財に指定されていないものも多いため、小規模な文化財建造物をどのように保存・活用するかは全国的な課題だと思った。

その後玄武洞を見学した。玄武洞は江戸時代以前は石材の産地とされ、礎石や漬物石などに使用されていたということである。中井淳史先生の講義で、但馬で産出された石材の歴史について研究した学生がいたという話を聞いて、玄武洞の研究は自然科学的な側面だけでなく歴史学的な側面でもとらえる方法もあるということが分かった。

次に、邪馬台国の卑弥呼が魏から受け取ったともいわれる三角縁神獣鏡などが出土した森尾古墳、但馬地域最大級の前方後円墳である池田古墳、畿内中枢部以外で初めて襟付短甲が出土した茶すり山古墳を見学した。

茶すり山古墳は墳丘に芝生を張り、埴輪の模型などを置いて整備されていたが、森尾古墳と池田古墳はほとんど整備が行われておらず、特に池田古墳は墳丘上に道路や畑、住宅などが作られ、原型をとどめていない状態だった。

その後昼食のために訪れた道の駅但馬まほろばには古墳に関する展示室が併設されていた。古墳の現地に展示施設などを整備できない場合はこのように人が多く訪れる場所に展示室を設けて発掘の成果などを展示することが古墳への理解を高めるために有効であると感じた。

最後に竹田城を麓から眺めた後、生野銀山を見学し

た。生野銀山では江戸時代から昭和時代までの鉱夫の姿を再現した人形を当時使われていた作業器具や機械とともに坑道内に配置し、当時の作業風景を再現していた。

生野銀山に行くのに通る道沿いにも銀山に関連する建築物や線路跡などの遺構が見られたので、銀山と一体化した保存・活用が必要だと感じた。



豊岡市交流センター「豊岡稽古堂」

## II 倉敷、岡山、吉備路の文化遺産を訪ねる

2024. 8. 25~8. 26

### 古建築と美術鑑賞

担当教員：神田 正章

美術史ゼミの今年の夏季研修旅行の行先は、例年の通り複数の候補地をあげて多数決をとり、岡山方面に決まった。近年の宿泊費や施設入場料の高騰により、関東や九州などの遠方は予算的に厳しくなりつつある。岡山は市の中心部に県立の博物館・美術館をはじめ、オリエント博物館や夢二郷土美術館、林原美術館など、美術工芸品の鑑賞には事欠かないほど展示施設が集中しているが、あいにく今回は休館の月曜日を含む日程にならざるをえなかったため、倉敷の大原美術館をメインとし、月曜日は社寺や史跡をめぐることにした。1泊2日の行程は以下の通りである。

8月25日(日)

午前：倉敷美観地区自由見学

午後：大原美術館

8月26日(月)

午前：岡山城／後楽園

午後：吉備津神社／備中国分寺／鬼ノ城

初日の倉敷は、博物館・美術館施設や歴史的建造物などの見どころが多いことから、午前は各自で自由見学とし、午後から揃って大原美術館を見学した。大原美術館はコレクションの多様さが特徴であり、各自が関心のあるテーマの展示室で、興味のある作品を、時間をかけて熟覧することができたと思う。ゼミ生のレポートを参照されたい。

2日目は、午前中は岡山城と後楽園を見学し、午後はバスを使って、吉備津神社と備中国分寺をまわり、鬼ノ城まで足をのびした。主に史跡や建造物の見学となったが、訪れた土地の歴史と風土に触れることも貴重な体験である。吉備津神社では桃太郎のルーツとされる温羅退治伝説に由来する「鳴釜神事」の話を御釜殿で聞き、温羅が築いたと伝える7世紀の山城である鬼ノ城では復元された西門まで登るなど、桃太郎伝説で彩られた吉備路の文化遺産を体感的に学んだ。

さて、研修旅行の所感を、古建築と美術鑑賞という視点から少しだけ綴ってみたい。今回、大原美術館、倉敷民芸館、UKIYO-E KURASHIKI/国芳館の3箇所、土蔵や古い日本建築を転用した展示を見た。いずれも建物本来の持ち味を活かした展示になっておりそれぞれ興味深かったが、これらは展示室に自然光を採り入れている点で共通している。紫外線が多く文化財を劣化させるのは周知のことで、今日、理想とされる文

化財の展示室の仕様とは異なっている。大原美術館の工芸館・東洋館と、倉敷民芸館は柳宗悦の民芸運動の影響のもとで設立されており、東京の日本民芸館と同様に古い蔵を改造して展示室としている。大原美術館工芸館・東洋館は芹沢銈介が手掛けており、様々な趣向が凝らされているが、倉敷民芸館の方はより素朴で露出展示が多いのが目を引く。民芸品は本来、庶民の日用品であり、ケースの中に飾って鑑賞する美術工芸品ではない。蔵の2階のむし暑い展示室で、木の床をきしませながら木製の古い棚に置かれた民芸品を柔らかな自然光のもとで見るのは、忘れかけていた何かを思いださせてくれるような新鮮な感動がある。「見せられる美」ではなく「見つける美」とでもいうべきか。柳宗悦が提唱した民芸の理念は今も確かに息づいていると感じる。

一方、国芳館は3年前に和風旅館をリノベーションしてオープンした歌川国芳の作品を集めた美術館である。国芳の代表作といえる「相馬の古内裏」をはじめ、躍動感のある武者絵がずらりと並ぶ光景は壮観である。美観地区の街並みを一望できるかつての客室は窓から射し込む陽光で明るい。「UKIYO-E KURASHIKI」という施設名からも外国人観光客を意識していることがうかがえ、床の間に額入の絵を並べる展示に多少の不自然さは感じるが、それでも和室での美術鑑賞はやはり日本人にはくつろげて心地よいものがある。

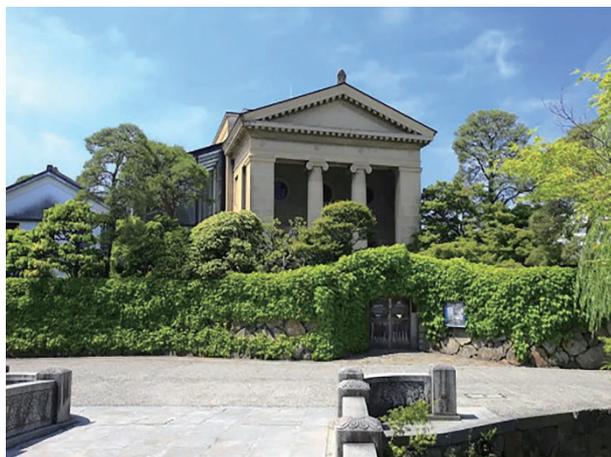
ミュージアムの展示は一種のマジックと言えるだろう。普段使っている何の変哲もない鉛筆1本でも、照明の演出一つでお宝に見せる力がある。しかしながら、人口照明で作品の持つ本来の自然な色や質感、いわば“肌合い”を正しく見せることは難しい。画家や彫刻家がアトリエの採光にこだわるのはそのためである。また重厚な展示ケースはそれだけで中の展示物を権威づけるような効果があるが、露出展示の方が見やすいことはいまでもない。私たちは美術品の保護と引き換えに、美術鑑賞における大切な要素を犠牲にしていることを忘れてはならないだろう。ゼミ生たちの目に、大原美術館の工芸館・東洋館の展示はどのように映ったのだろうか。

### 大原美術館を訪れて：矢田有沙

今年のゼミ旅行では岡山・倉敷を訪れ、倉敷の美観地区や岡山後楽園をはじめ様々な場所を訪れたがその中でも初日に訪れた大原美術館が印象に残った。大原

美術館は、倉敷を基盤として幅広く活躍した事業家である大原孫三郎が、設立前年の 1929 年に死去した画家の児島虎次郎を記念して 1930 年に設立した美術館である。この美術館は日本で最初の西洋美術を中心とした私立美術館であるが、その作品のジャンルは西洋美術から日本の近代から現代の美術、民芸運動にかかわった作家たちの仕事などにコレクションを広げておりそのユニークな作品群から注目を集めている。

私は大原美術館を訪れ、元より西洋絵画について興味を惹かれていた私にとっては、展示の中で特に絵画の鑑賞体験はどれも興味深いものであった。まずこの美術館の基盤となった児島虎次郎の作品を鑑賞し、その中で『和服を着たベルギーの少女』という作品が印象に残った。この絵はその名の通り、児島虎次郎がベルギーに留学中に和服を着たベルギー人の少女を題材とし描いた絵画である。私がこの絵に魅力を感じたのは、西洋画法が用いられた絵画であるのにも関わらず日本に寄り添ったような親近感のある絵画であると感じたためである。題材となった少女は、日本を象徴する着物を着ており絵画の広範囲をしめているためそう感じるのかもしれないが、少女の顔の造形を観察すると目が大きく鼻も高い、そして髪の色や肌の色からも分かる通り西洋人である。しかし、着物を着ることで西洋人の特徴となる身体の骨格が隠れており、西洋的な要素は顔の部分のみに限られると感じた。そのため、喜んで着ているというより、誰かが頼み込んで不本意ながらも少女がモデルとなっているように見え、日本の文化をベースとしてその文化に触れている少女という印象が自分にとって魅力的であったのだと考える。また、右側の棚の中には西洋風の陶器などの他に日本人形のようなものが見えることもあり、日本と西洋の要素を絶妙なバランスによって配置することにより完璧な西洋絵画とは言い難い独特な絵画として完成していると私は感じた。そして、この日本と西洋との絵画内での交流が児島虎次郎の中に抱いていた理想形



大原美術館本館を正面より見る

のようなものであったのではないかと私は感じた。また、この大原美術館の見学を経て印象に残った点は、展示内容により複数のタイプの異なる展示館に振り分けられるということだ。まず、入口となる本館の門にはギリシャ建築のような彫像や柱がデザインされており、入場以前に視覚的に西洋を感じることができる仕様となっている。館内に入ると、天井が高く展示間のスペースも広く取られているため、東洋の展示物が配置される東洋館に比べ開放感のある空間が演出されているように感じた。私は大原美術館を訪れて、美術館というものは何を展示しコレクションしているのかが最も重要であるが、館内外の様相や構造にこだわることでそれらの展示品が最も映えるような展示環境を提供することもまた美術館にとって必要不可欠な要素であると感じた。

今回のゼミ旅行に参加して大原美術館をはじめ岡山城・後樂園などを訪れたが、初めて岡山・倉敷に足を踏み入れた私にとってどれも有意義で充実した時間を過ごすことができた。次の機会があれば、1人で旅行計画を立て他の文化遺産へ訪れてみたいと感じた。

### 大原美術館と吉備津神社を訪れて：青木悠

今回のゼミ旅行で、特に関心を持った見学地は大原美術館と吉備津神社である。

まず、大原美術館についてである。大原美術館は日本で最初の西洋美術中心の私立美術館である。倉敷を基盤に幅広く活躍した事業家の大原孫三郎により昭和 5 年（1930）に設立され、現在では教育普及活動や美術講座、ギャラリーコンサート等を通して、多彩な活動を展開している。所蔵している作品は近現代を中心とした西洋美術品と日本美術品の他にも、中国や古代オリエントの美術品や日本の近代工芸と多岐にわたる。

観覧した展覧会は「特別展 異文化は共鳴するの  
か？大原コレクションでひらく近代への扉」である。展覧会の概要は、大原美術館のコレクションを通して、19 世紀後半から 20 世紀前半までの近代美術の再検討を行い、近代美術と大原美術館の魅力を新たな角度から紹介しようというものである。大原美術館の出発点は、洋画家の児島虎次郎が大原孫三郎の支援の下に収集した、近代を中心とする西洋美術作品である。そうした大原美術館のコレクションは西洋の現代美術や日本の近現代美術、民芸運動と縁の深い作家たちの作品へと拡大していく。再検討の手法としては「大原美術館独自の近代美術再検討」、「文化交流の視点に沿った新たな展示」、「作品と資料による時代相の再現」である。印象に残った作品は「春の光」と「果物」である。「春の光」はモチーフである桜や羊の明るさで春の暖かい雰囲気が表現されているように感じられた。また、

全体的に淡い色合いであるものの、影や明暗が他の作品と比較してはっきりしているように感じた。そして、「果物」は一枚の絵の中に、遠近法で描かれたものもあれば、バナナなど俯瞰的で遠近法的な描き方でないモチーフもあり、空間の認識や把握が崩される、違和感を持たせる作品であった。展覧会全体を通して、展示された作品が、近代における日本と西洋の文化的な相互作用を示していることが感じられた。また、大原コレクションの多様性が感じられる展覧会であった。次に吉備津神社についてである。吉備津神社は、岡山市の西部、備前国と備中国の堺にある吉備中山の北西麓に北面して位置している。創建に関して、創建時期と創建者は文献もなく不明であるが、古代からの歴史を持つ神社である。主神は大吉備津彦命（オオキビツヒコノミコト）であり、吉備地方の開発や農業の神として信仰されている。また、大吉備津彦命の異母弟である若日子建吉備津日子命（ワカヒコタケキビツヒコノミコト）と、その子である吉備武彦命など、一族の神々も祀られている。

本殿および拜殿は一体のものとして国宝に指定されている。本殿は実際に間近で見ると、非常に大きく迫力のあるものだった。大きさとしては京都の八坂神社に次ぐ大きさで、出雲大社の約2倍以上の広さであるとされる。また、本殿の造りは全国で唯一の様式であり、「吉備津造り」と呼ばれている。屋根の緩やかなラインや柱の配置が整っており、視覚的に非常に美しく、威厳が感じられる本殿であった。

今回のゼミ旅行では岡山県の文化財や美術館等を見て回ることができた。これを機に、これからは様々な文化財や美術館等を巡りたいと思う。

### 大原美術館を見学して：上村祥太

私は今回のゼミ旅行で様々なところを見学したが、大原美術館が特に印象に残った。

大原美術館は倉敷の実業家大原孫三郎（1880-1943）が、洋画家児島虎次（1881-1929）に託して収集した西洋美術・古代エジプト美術・中近東美術・中国美術などの作品を展示するため、1930年に開館した。そのため大原美術館は西洋美術、近代美術を主に展示するほか、東洋美術、工芸品など幅広く展示している。本館の入り口の両脇にはオーギュスト・ロダン作「洗礼者ヨハネ」「カレーの市民」が迎え入れる、本館ではエル・グレコの「受胎告知」、モネの「睡蓮」、ゴーギャンの「かぐわしき大地」などの有名な作品が展示されている。今回は特別展「異文化は共鳴するのか？大原コレクションでひらく近代への扉」が開催されていた。その中でも印象に残っているのはムンク作の「マドンナ」である、ムンクと言えば有名な作品である「叫び」の

イメージが強く、私自身も本作品を見るまでそのイメージしかなかった。この作品を見たとき私は強烈な印象を受けた。本作品は題名の通り女性を描いている作品である、マドンナは聖母という意味であるが聖母のイメージには程遠い、女性の身体は痩せていて顔には生気がない、瞼を閉じ顔全体には影がありこけた印象を持つ。女性以外に注目して見ると左下には身体に比べて頭が大きな胎児のようなものが描かれている。聖母は憧れとして描かれることも多く、様々な作品で描かれているが、本作品は伝統的な聖母のイメージとは異っており、作者であるムンク自身の女性観を表わしているのではないかと考えられるとても興味深いものになっている。

大原美術館では本館の他、東洋・工芸館が常設で展示をされている。東洋館では児島虎次郎の収集作品である中国の古美術作品が主に展示されている。工芸館では河井寛次郎、バーナード・リーチ、富本憲吉、芹沢銈介、濱田庄司、棟方志功の6人の作品が展示されている。これら6人は明治期の民芸運動に関わっていた人物であり、本館の民芸運動についての展示と合わせて多くの民芸品を見ることで民芸運動についても学ぶことができる。展示品以外に工芸・東洋館の外装・内装・展示、蔵の配置は、染色工芸家であり總一郎と親交の深かった芹沢銈介が、細かくデザインしていて多くの見どころがある。6人の展示室は部屋ごとに分かれて展示されているが、それぞれ特色がある。例えば一階では木のレンガの床であるが、2階の河井寛次郎の展示室では朝鮮張りと呼ばれるもので、それは河井寛次郎が朝鮮古陶磁の手法を学ぶなど朝鮮に興味を持っていたことからそのように作られている。棟方志功の展示室の壁に埋め込まれている丸太は、倉庫で使われる「荷ずり木」と呼ばれるもので、荷物と壁が密着しないようにするために作られ、荷物が壁でこすれず、隙間により湿気を溜まりにくくする役割がある。

棟方志功は、多くの木版画を残していることからこのような展示室になっているのではないかと考える。またスタンドグラスには地元倉敷の倉敷ガラスが使用されているなど、展示品以外にも注目するポイントが数多くある。このように東洋・工芸館は展示品以外にも展示室全体を楽しめるような仕様になっている。

今回のゼミ旅行では大原美術館以外にも様々な美術作品などを鑑賞することができるとても良い機会であった、そして美術作品は実際に目の前で見ることの重要性も改めて感じることもできた。

### 吉備津神社・鬼ノ城を訪れて：坂東佳達

今回のゼミ旅行では、岡山・倉敷を訪れた。私は一度も訪れたことのない土地だったため、非常に良い経

験となった。その中でも私が最も記憶に残った場所が吉備津神社である。

吉備津神社は岡山市西部、備前国と備中国の境の吉備中山（標高 175m）の北西麓に北面して鎮座する。吉備中山は古来神体山とされ、北東麓には備前国一宮・吉備津彦神社が鎮座する。当社と吉備津彦神社とも、主祭神に、当地を治めたとされる大吉備津彦命を祀り、命の一族を配祀する。

社伝によれば、祭神の大吉備津彦命は吉備中山の麓の茅葺宮に住み、281歳で亡くなって山頂に葬られた。5代目の子孫の加夜臣奈留美命が茅葺宮に社殿を造営し、命を祀ったのが創建とする説もある。また、吉備国に行幸した仁徳天皇が、大吉備津彦命の業績を称えて5つの社殿と72の末社を創建したという説もある。現存する本殿・拝殿は、室町時代の明德元年（1390）、後光厳天皇の命を受けた室町幕府3代将軍の足利義満が造営を開始し、応永32年（1425）に遷座した。比翼入母屋造の本殿の手前に切妻造、平入りの拝殿が接続する。比翼入母屋造とは、入母屋造の屋根を前後に2つ並べた屋根形式で、「吉備津造」ともいう。

実際に訪れてみた感想としてはこの特殊な造りに圧倒された。国内でもここでしか見られない建築に目を奪われた。実際に見ることの良さを再確認できた。

鬼ノ城は、吉備高原の南端に位置し、標高397メートルの鬼城山の山頂部に所在する。すり鉢を伏せた形の山容の7~9合目の外周を、石塁・土塁による城壁が鉢巻状に2.8キロメートルにわたって巡る。城壁で囲まれた城内の面積は、約30ヘクタールである。城壁は土塁が主体で、城門4か所・角楼・水門6か所などで構成される。城内では、礎石建物跡7棟、掘立柱建物跡1棟、溜井、烽火場、鍛冶遺構などが確認されている。鬼ノ城は、山城に必要な設備がほぼ備わり、未完成の山城が多い中で稀な完成した古代山城とされている。

実際に訪れてみて当時の城壁を再現したものごとくも目を引いた。実際に当時この規模の山城が建築さ



吉備津神社本殿全景

れていたことを考えるととても壮大であると感じた。山の上にあるため少し斜面を登って現地へと赴いたが、景色が非常によく、地理的な面で山城は防衛に適していたのだらうと思った。ヤマト政権時代にこのような建造物がこのような場所にあったことが現代においてわかるのはとても貴重なことであると感じた。

## 岡山後樂園と岡山城を訪れて：高尾悠介

今回のゼミ旅行では、岡山県を訪れ、現地の様々な史跡・名勝や博物館施設（美術館）、寺社仏閣を見学し、理解を深めることができた。本レポートでは、私がかつてに関心をもった2つの史跡・名勝の見どころについて、報告する。

### 岡山後樂園

#### ・建設過程

岡山県の後樂園は、岡山藩主・池田綱政が1687年に建設を始め、約14年をかけて1700年に完成した。設計や造園は、池田家の家老である津田永忠（つだ えいちゅう）が主導し、庭園の設計には「池泉回遊式庭園」と呼ばれる日本庭園の伝統的なスタイルが採用された。この様式は、中央に大きな池を配置し、その周りを回遊しながら庭全体を楽しめるように設計されている。

#### ・現在の姿

現在の後樂園は、広さ13ヘクタールを誇り、日本三名園の一つとしてその美しさを維持している。池を中心に、築山、小川、茶室、能舞台などが巧みに配置されており、四季折々の自然美を楽しむことができる。春には桜や梅、秋には紅葉が見事で、年間を通じて多くの観光客が訪れる。庭園内では、鶴や鯉が飼育されており、特に鶴が優雅に歩く姿は後樂園の象徴の一つとなっている。また、後樂園は何度か修復が行われており、第二次世界大戦後には戦災からの復興も行われたが、当初の設計を尊重しつつ、現在までその魅力を伝え続けている。

### 岡山城

#### ・鳥城と呼ばれた黒い天守

当時の天守は、外壁の下見板（したみいた）に黒い漆が塗られていた。光に照らされると、まるで烏（からす）の濡れ羽色のように艶めいていたので、岡山城には「鳥城」の別名がある。天守を黒色にしたのは、秀吉から使用を特別に許可された金箔瓦の輝きを一層美しく見せるためともいわれている。この黒い天守を眺めることによって、秀家と秀吉の間に強いつながりがあったのだと思いをはせることができた。

#### ・不等辺五角形の天守台

織田信長の安土城を模したともいわれる岡山城の天守台は、不等辺五角形の形が特徴的である。天守台の石垣下から天守を眺めると、上の階と下の階の屋根

の並びが平行ではなく、歪んでいるように見える。四角形ではない天守台に築かれた天守の構造には、その歪みを修整する工夫が施されている。不等辺五角形の土台の形のままに1階部分を建て、変形した形のまま上階まで築き上げてしまうと、天守の歪みは大きくなり倒壊する可能性がある。それを防ぐため、上階の建て増ししたような部分で歪みの修正をしている。

天守台が不等辺五角形なのは、もとの地形を生かしているからといわれている。整った天守台をつくることに労力を費やすのではなく、地形を生かし活用することで工期の短縮を狙ったのかもしれない。天守台の形状の欠点を補うために活用されたのが、注文住宅のように設計の自由度が高い望楼型の天守の構造である。そして、それを可能にしたのは、法隆寺から続く日本の高い技術力があるからこそではないであろうか。岡山城の天守は、変形の土台を天守の構造と技術力でカバーした、芸術的な作品だと思った。

以上のことから、岡山後楽園と岡山城について関心をもった。岡山後楽園は、岡山城主であった池田綱政公が家臣に命じて造らせた江戸時代を代表するやすらぎの庭園であり、岡山城は豊臣秀吉の家臣で五大老の一人である宇喜多秀家が築城した名城である。岡山後楽園と岡山城は、安土桃山時代(戦国時代)から江戸期の文化・様式を伝える名勝・史跡として、2つをともに見てこそ、岡山の歴史がさらに深まる関係であることがわかった。

### 「キリストとマドレーヌ」：昆成見

ゼミ旅行を通して最も印象に残ったのは、大原美術館で見た作品だった。

そもそも大原美術館とは、事業家大原孫三郎によって創設された私設美術館である。有名な所蔵作品としては、真っ先にクロード・モネによる「睡蓮」のうちの一枚が挙げられる。「睡蓮」を日本で所蔵する美術館は13館ほどであったと思うが、日本にあるものの中



岡山後楽園唯心山からの展望

で最も柔和で実直で明るい印象を受ける作品が大原美術館のものであると思う。モネの直感的にわかりやすい絵は、西洋美術の学に疎い私にとって素直に感心させられるものであった。その他に有名な作品といえばエル・グレコ作の「受胎告知」がある。エル・グレコの色彩感覚と大胆な構図を用いて描かれたこの作品は臨場感に溢れるもので、17世紀初頭にこの作品が描かれていたことに驚かされた。

しかし、私は上記の2点よりも、「受胎告知」と同じ展示室に展示されていた1点の絵画に衝撃を覚えた。それこそがジョルジュ・デヴァリエール作「キリストとマドレーヌ」である。

ダイナミックな受胎告知と対照的に、「静」とでもいうべき作品である。少し暗い展示室で仄かに照らされ浮かび上がるのは抱き合う男女の姿であった。パネルでは20世紀フランスにおけるキリスト教芸術再興の旗手として紹介されていたが、一般的に想像する宗教画のような、その神秘性を表現するために描かれる神の子としてのキリストとは違った。受難した身体は血色を失い、マドレーヌに支えられているようにも見える。しかしその中でも、人間の不屈の精神を表すように開かれる目が確かにこちらを見ていた。私はその衝撃が忘れられず、後日インターネット上に転がる作品の写真を見返したが、ただの西洋絵画のうちの一枚としか感じられなかった。しかし、あの瞬間展示室で対峙した時、静かに、それでいて強く信仰に燃える目が確かにこちらに向けられていたのである。

この作品を描いたデヴァリエールの他作品はどのようなものであるか。国立西洋美術館の「聖母の訪問」を挙げたい。この作品は聖母マリアのエリザベト訪問の場面を描いたものだが、この場面を描いた他の作品とは違い、「場景」というよりも「情景」という言葉が正しく思える作品である。それこそ聖書に書かれるような出来事であるとは思えない、日常の一場面を切り取ったかのごとき絵画なのである。

話を「キリストとマドレーヌ」に戻す。そもそもこの作品は聖書には記載のない場面を描いたものである。そこで私は、宗教画の持つ本質的な意義をデヴァリエール自身が捉えていたのではないかと考えた。彼はこの場面を創作してでも、苦しみにあえぎながらも信仰を続け決して倒れることのない人間の強かさを表したかったのではないだろうか。近代戦争に代表される新たな苦しみに怯えることになった近代人に寄り添い、力を与える役割を果たしているこの作品は、本質的に見れば宗教画として捉えられるものである。

ゼミ旅行でこの作品に出会う機会ができたことは一生のものになると感じた。

## 岡山城と大原美術館を訪れて：岡本渉聖

神田ゼミのゼミ旅行では、岡山県を訪れた。岡山城（後樂園）、大原美術館、鬼ノ城、吉備津神社、国分寺などさまざまな文化財を見学した。その中でも、岡山城と大原美術館が特に印象に残ったので詳しく述べていく。

岡山城は、1597年に宇喜多秀家によって完成し、外観の黒さから「烏城」とも呼ばれている。天守は不等辺五角形の3層6階建てで、その独特の形状と外観が特徴。関ヶ原の戦い後は、小早川秀秋が城主となり、その後、池田家に引き継がれた。城は1945年の空襲で焼失したが、現在は再建され、岡山の歴史を学ぶ博物館として活用されている。2022年には大改修が行われ、展示や体験コーナーが充実し、岡山城の戦国期から江戸時代の歴史を伝える場となっている。岡山城の館内には、城主に関する展示があり、戦国時代から江戸時代にかけての岡山城の歴史や城の変遷が詳しく紹介されている。体験ブースも設けられており、来館者が刀剣や甲冑に触れ、戦国時代の武具を直接体感でき、当時の雰囲気感覚が味わえるようになっている。また、外には月見櫓などの重要文化財が現存しており、防備のための要塞としての一面だけでなく、文化的な側面をも備えた建造物の美しさを鑑賞することができる。岡山城は、地域の歴史や文化を深く学ぶことができる貴重な場所だと感じた。

次に大原美術館は、1930年に設立され、洋画家児島虎次郎が収集した西洋美術作品を基盤としている。美術館は、本館、分館、工芸・東洋館の3つの館から成り、西洋美術、日本の近現代美術、東洋の古美術や工芸品が展示されている。本館では、モネ、ルノワール、エル・グレコ、ゴッティンといった19世紀から20世紀にかけてのヨーロッパの名画が展示されており、特にモネの「睡蓮」やエル・グレコの「受胎告知」などが代表的な作品である。分館では、日本の近代的洋画や現代アートが展示されており、児島虎次郎、岸田劉



旭川越しに岡山城を望む

生、梅原龍三郎といった明治から昭和期にかけて活躍した日本の洋画家の作品が中心である。これらの作品は、西洋の技法を取り入れつつも、日本の美的感覚を融合させた独自のスタイルが特徴的だ。また、工芸・東洋館では、中国、朝鮮、日本の陶器や漆器など、東洋の古美術や工芸品が展示されており、東洋の美的伝統を学ぶことができる。現在開催中の特別展「異文化は共鳴するのか？」では、大原コレクションを通じて文化交流の視点から近代美術を再検討する展示が行われている。この展示は、異なる文化がどのように影響し合い、共鳴するのかを探る内容となっており、地域の美術館としての役割を超えた国際的な視点を与えている。

今回のゼミ旅行で、岡山の文化財を多数見学することができ改めて岡山県の魅力を実感した。岡山のみならず全国の文化財を訪れたいと思った。

## 倉敷美観地区と岡山城を訪れて：根本力也

今回はゼミ旅行として岡山県に行った。その中でも倉敷美観地区と岡山城について取り上げる。

倉敷の美観地区は、江戸時代の街並みを色濃く残した歴史的保存地区であり、倉敷川沿いの白壁の蔵や石畳の道が特徴である。もともとこの地域は、幕府の直轄地である「天領」として栄え、倉敷川を通じて米や物資の輸送が盛んに行われていた。現地では、当時の物流拠点としての役割が重要であったことがわかった。また、倉敷の「倉」という名前は米の保管場所に由来しており、街並みにはその名残を感じさせる蔵が多く見られる。特に印象に残ったのは、明治時代の紡績工場を改装した倉敷アイビースクエアである。この建物は、江戸時代から続く商業活動の発展と、近代化による産業の変化を象徴している。地域の歴史と共に、文化が保存されていることに感銘を受けた。このように、倉敷美観地区の街並みや歴史は、伝統と近代が調和した独特の魅力を持っており、歴史的背景が現在の街並みに色濃く反映されていることが理解できた。

岡山城は、戦国時代末期に宇喜多直家とその子、宇喜多秀家によって築かれた城で、その歴史は波乱に満ちている。岡山城は黒い外壁が特徴で、「烏城（うじょう）」という別名を持つこの城は、戦国大名の居城として、また後に岡山藩の中心として重要な役割を果たした。現地を訪れ、その壮麗な姿に圧倒されるとともに、城がたどってきた歴史的な変遷について学んだ。宇喜多氏は、豊臣秀吉の側近として勢力を伸ばし、岡山城を拠点に大きな影響力を持った。特に、宇喜多秀家が領主であった時代には、岡山城は政治・軍事の拠点として非常に重要な位置にあった。しかし、関ヶ原の戦いで西軍に属した宇喜多秀家が敗れると、宇喜多氏は

没落し、岡山城も他の大名の手に渡ることになる。その後、小早川秀秋や池田輝政が岡山城を治め、江戸時代には池田氏が長くこの城を支配した。池田氏の治世下で、岡山城下町は発展を遂げた。城周辺の整備が進められ、城の構造も強化され、城下には商人や職人が集まり、経済活動が活発になった。また、岡山城は江戸時代に入ると幕府の監視下に置かれ、地方の政治的・軍事的拠点として重要視されるようになる。しかし、岡山城の歴史において大きな転機となったのは、明治時代の廃藩置県である。全国的な城の取り壊しや廃城令の影響を受け、岡山城もその一部が取り壊され、残された天守も太平洋戦争中の空襲によって焼失してしまった。城郭の多くが破壊され、戦後は廃墟同然となってしまったが、1966年に鉄筋コンクリート造で天守が再建され、岡山のシンボルとして復活を遂げた。現代の天守は、かつての姿を忠実に再現しつつ、内部は博物館として利用され、訪問者に岡山城や地域の歴史を伝えている。岡山城を訪れて特に印象深かったのは、城と隣接する後楽園との関係である。後楽園は江戸時代に岡山藩主・池田綱政によって造営され、藩主の居住空間として利用されてきた。城から見下ろすことのできる庭園の風景は圧巻であり、藩主たちがこの景色を楽しみながら政治を行っていたことが容易に想像できた。「後楽園」という名称は、儒教の「先憂後楽」という言葉に由来しており、領民を第一に考える藩主の姿勢を象徴している。現地で学んだのは、岡山城が単なる軍事拠点や政治の場ではなく、藩主の文化的な生活の場としても機能していたという点である。また、現代における岡山城は、地域の観光資源としても重要な役割を果たしている。再建された天守は観光客に人気があり、内部には戦国時代から江戸時代にかけての岡山の歴史に関する展示が行われていた。特に、宇喜多氏や池田氏による支配の移り変わりや、岡山城が地域社会に与えた影響について詳しく学ぶことができた。

このように、岡山城は戦国時代から現代に至るまで、政治的・軍事的、そして文化的な役割を果たしながら変遷を遂げてきた。訪問を通じて、岡山城の歴史の深さと、その背後にある大名たちの治政や生活様式を垣間見ることができ、非常に興味深い体験となった。

### 大原美術館を訪れて：大崎留果

今回のゼミ旅行で、私が特に印象に残ったのは、岡山県倉敷市に位置する大原美術館である。大原美術館は、1930年に日本初の西洋美術中心の私立美術館として誕生した。創立者は、倉敷で活躍した事業家の大原孫三郎である。孫三郎の支援を受けた画家の児島虎次郎は、西洋美術を中心に、中国やエジプト美術など多くの作品を倉敷にもたらした。彼が収集したエル・グ

レコ、ポール・ゴーギャン、クロード・モネ等の作品は、今も大原美術館の中核をなす作品である。

大原美術館は本館と分館と工芸・東洋館の3館に分かれる。残念ながら分館は工事中だったため入ることはできなかったが、本館と工芸・東洋館だけでも多くの作品が展示されており、とても楽しめた。本館には、児島虎次郎や青木繁などの日本人画家の作品、そして、モネ、ピカソなどの世界的名画が並んでいた。私は印象派の作品が好きなので、モネやルノワールの作品を見ることができて満足だった。また、工芸・東洋館では、河井寛次郎やバーナード・リーチといった陶芸家の作品や、児島虎次郎の収集を中心とした東洋の古代美術品を見ることができた。

多くの作品のなかでも、私が一番心を惹かれたのは、児島虎次郎の「春の光」という作品である。この作品は、満開の梅林に5匹のヤギが描かれ、全体的に明るく淡い色合いをしている。児島虎次郎の作品は他にも展示されておりどれも色彩明るく感じたが、「春の光」はより明るく描かれているように感じた。初めて見たときは、「春の光」という題名の通り、春の暖かい日差しが伝わってくるような印象を受けた。淡い色合いから優しく包み込まれているような感覚になり、一目でこの作品が気に入った。また機会があればぜひとも見に行きたいと思う。

大原美術館は、展示作品だけでなく建物の意匠も魅力的である。

本館の外観は、古代ギリシャ・ローマ神殿を思わせるが、入口両脇にある窓の鉄格子のデザインは、1910年半ばから1930年代にかけてヨーロッパやアメリカで流行したアール・デコの表現であったり、3つの丸窓はゴシック建築のバラ窓を思わせたりと、様々な意匠が凝らされている。

工芸・東洋館は、江戸時代の米蔵を改装してつくられたもので、白壁が中庭を囲むように並んでおり時代を感じさせる外観になっている。なかには、外壁が白



ジヴェルニーの日本庭園から株分けされた睡蓮

ではなく赤く塗られた蔵もあり、小振りながらも存在感を放っていた。館内は、床が栗材の木レンガとなっている部屋があり、歩くたびにカラカラと軽い音が鳴った。この木レンガの下には砂が敷かれていて、それぞれのレンガの凹凸を調整してフラットになるように工夫されているようだ。また、河井寛次郎室では、河井が好んだと伝わる朝鮮張りの床になっており、踏むとギョギョと音が鳴った。「朝鮮張り」とは、朝鮮半島の民家に用いられる張り方で、薄い床板を土台の木材に、釘で打ち付けずに少し浮かせて張っているようだ。

工芸・東洋館の横には、睡蓮が浮かぶ小さな池がある。この池の睡蓮は、大原美術館創立70周年の際に、モネのジヴェルニーの自宅庭園から株分けされて移植したものだそうで、実際にモネの花を見られるとは思っておらずとても驚いた。

大原美術館を初めて訪れたが、展示内容の充実さや建物の意匠が凝らされているところなど見どころが多く、また行ってみたいと思う美術館だった。現在、大原美術館は児島虎次郎記念館の整備を進めているようなので、そちらもぜひ併せて訪れたいと思う。

### 岡山県を訪れて：網本光真

今回訪れた場所の中で印象に残った場所について記載する。

まず一つ目は、大原美術館である。紡績などで財を築いた大原孫三郎が1930年に創設した美術館である。孫三郎からの支援を受けた洋画家の児島虎次郎の作品や、虎次郎が渡欧した際に買い付けた美術作品を中心に展示している。西洋の前衛的な作品や、当時の日本の洋画、民藝運動を主導した作家の作品が本館、工芸・東洋館に分かれて展示してある。ギリシャ神殿のような外観はとてもインパクトがあり、外観からも芸術性を感じた。訪問時に本館で開催されていた「特別展 異文化は共鳴するのか？」では、展示してある作品のほとんどは私が苦手としているジャンルであったため、あまり楽しむことが出来なかった。しかし、その中でもエル・グレコの「受胎告知」は中学時代の美術の資料集で知って以来、一度は目にしたいと思っていたため感無量であった。その他にも、セガントーニの「アルプスの真昼」など少ないながらも琴線に触れる作品があった。工芸・東洋館では、自分の興味が強い工芸で良いものに巡り合えた。その中でも、浜田庄司やバーナード・リーチの陶器、芹沢銈介の型絵染めはとても良かった。

二つ目は、大原本邸である。敷地内全10棟が国指定重要文化財の旧大原家住宅は1795年に建築が始まり、明治中期にはほぼ現在の形になった。倉敷窓、倉敷格子といった倉敷の町家建築の特徴を備えている。見学

をして私はこの施設の活用方法に疑問を感じた。特に土間の「ふりそそぐ言葉」は風情を台無しにする悪手なのではないかと感じた。外観だけは風情が残っているが、倉の中は改装されており当時の名家の暮らしを知るのほとんどでできなかった。しかし、歴代の当主が使用した離れ座敷の「思索の間」は観光地でありながら、外とは完全に切り離された静寂の空間でありとても良かった。整ってはいないながらも丁度いい庭や茶室など派手さはないが落ち着いた雰囲気で大原家の本質を見たように感じた。

三つ目は、岡山後楽園である。岡山後楽園は、岡山藩主池田綱政が家臣に命じて1700年に一応の完成をみた日本三名園に数えられる江戸時代を代表する大名庭園である。派手さはないものの、広大な敷地に緑が広がる街中のオアシスだと感じた。最初は地味だと感じたが、園を歩くにつれ三名園と呼ばれるだけの植物・池・建物の配置や大きさに気付いた。また、後日別の庭園に行った際に現地では感じなかった良さを痛感した。主観にはなるがこの場所からの景色はこうあってほしいという考えが、外れることなく作り上げられていた。

四つ目は、鬼ノ城である。史書に記載はないが、7世紀後半に白村江の戦いで敗北後防衛を整えた際に築城されたと考えられている。他の古代山城と比べて朝顔色が強いいため、防衛としてではなく渡来人が移り住んだ居住空間であった可能性がある。現地に行って7世紀後半に山の上に城を建てる技術があったことに驚いた。やはり渡来人の技術は進歩していたのだと感じた。また、このような場所に異国の人間が住んだことで現地の人々が恐れ、話が飛躍し鬼が住んでいるとされたのではないかと考えた。桃太郎の話が作られたのも現地に行って改めて納得した。

今回のゼミ旅行を通して京都に閉じこもるのではなく外に出て色々な場所に行くことで、視野が広がり新たな知見が得られることに気付いた。この経験を糧



鬼ノ城より造山古墳・備中国分寺方面を望む

に今後の学習に活かしていきたい。

### 岡山城と岡山後楽園を訪れて：渡辺早希

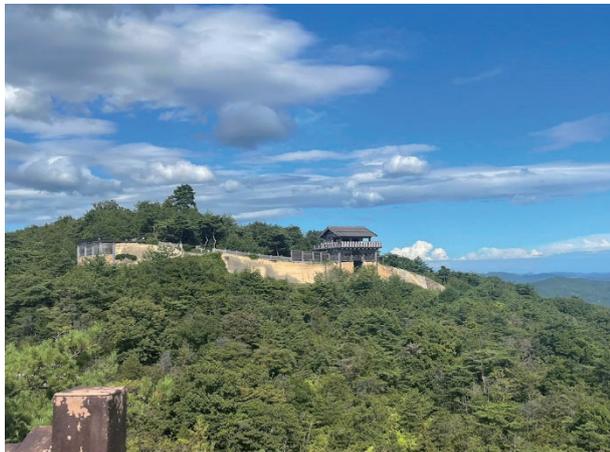
今回、ゼミ旅行で岡山を訪れた。1泊2日という日程で5か所以上巡ったが、その中で印象に残ったのは岡山城と特別名勝の岡山後楽園だ。

はじめに、岡山城と後楽園の概要について見ていく。岡山城は宇喜多直家が築いた石山の城を前身として、直家の子である宇喜多秀家によって慶長2年（1597）に築城された。旭川の河道を利用して、流れを城の北や東を守るように整えたり、堀づくりに活用し、堀の間に南北に長い城下町を作り上げたりした。この城下町は今に続く中心市街地の原型ができ、岡山の名が、市名、県名となる礎となった。岡山城主は、創築から廃藩置県まで14代に渡り、初代城主は秀家である。その後小早川秀秋、池田氏が城主となり、城と城下町はさらに拡張され今に至る。

築城は豊臣秀吉の指導によるものといわれ、天守は不等辺五角形という珍しい形をしており、3層6階建てとなっている。外壁は黒塗りの下見板で覆われていて、「烏城」という別名がある。また、秀家時代の金箔瓦が出土しており、築城時には城内の主要な建物の随所に金箔瓦が用いられていたと考えられている。これより「金烏城」とも呼ばれている。天守は明治維新後も残っており、昭和初期には詳細な図面が残されたが、昭和20年（1945）の空襲で焼失する。その後1966年に再建された。

天守の最上階からは後楽園を見ることができる。後楽園は「御後園」とも呼ばれ、藩主池田綱政が家臣の津田永忠に命じて、貞享4年（1687）に着工、元禄13年（1700）には外形が完成する。かつて藩主の静養の場、賓客接待の場として使われたが、日を定めて藩内の人々にも観覧が許されていた。明治17年（1884）に岡山県に譲渡され、一般公開されている。

岡山城へは JR 岡山駅から路面電車を使い、徒歩で天守閣まで向かった。天守閣へ行く道の途中には石垣



鬼ノ城復元部全景

をたくさん見ることができる。はじめに城内を見学した。城内は、最上階から下の階へと順路となっており、最上階では岡山城周辺の景色を眺めることができる。また、展示スペースがあり、岡山城の歴史や地域がどのように発展していったのか、歴代城主がどのように城主となったのかなどについて学ぶことができる。展示以外に体験スペースやフォトスポットもあり、ただ学ぶだけではなく楽しく学べる空間であった。他には発掘調査で見つかった築城当時の石垣が公開されていた。当時の石垣を間近で見ることができるようになっている。

岡山城の後は後楽園を見学した。岡山城から月見橋を通過して、南門から入場した。南門に入る前の道には食事処があり、そこからは岡山城を見ることができる。岡山城を眺めながら食事することができるスポットである。

春夏秋冬で後楽園の景色は変化する。訪れたのが夏だったため、緑豊かな後楽園であった。正面入口付近には鶴鳴館という建物があり、この建物は園内外の景観が一望できる後楽園の中心的建物である。鶴鳴館は建物内に入ることができ、見学当時は染物の体験会が開催されていた。

今回のゼミ旅行で訪れた岡山城・後楽園を見学して、岡山城周辺がどのような歴史を持っているのか、また、岡山にゆかりのある人物についても知ることができた。地元ではなくても今回のように他地域の歴史を知ること、それに関わる人々について知ることは大切なことであると感じた。

### 岡山城を訪れて：大田悠月

岡山城は、豊臣秀吉の指導の元で慶長2年（1597）に宇喜多直家が築いた石山の城を前身として宇喜多秀家が完成させた。関ヶ原の戦いにおいて敗戦した秀家が流刑となった後は、小早川秀秋が城主となり改築に取り組んだが、2年足らずで病死し、以後は池田家が城主として管理を行った城である。天守は珍しい不等辺五角形をした3層6階建てとなっており、これは織田信長の安土城を模したからだと考えられている。黒い下見板張りの外観から、別名「烏城（うじょう）」と呼ばれている。最上階からは後楽園を見ることができる。旭川の流れを変えて本丸の北面～東面を巡らせたため堀の役割を担っていた。昭和20年（1945）の空襲で焼失したが、現在は再建されている。

岡山城内は地下1階から6階までが公開されており、主に戦国期の岡山城や歴代城主についての資料が展示されているため岡山の歴史を学ぶことができる資料館のような役割を担っていた。最上階である6階は戦災で焼失する前の姿として華頭窓、壁の唐紙が再現され

ていた。5 階では城下町の発展の過程がジオラマや音声を用いて解説されていた。4 階では宇喜多家と秀吉との関係性についての解説が行われており、3 階では関ヶ原の戦いについての解説が行われ、2 階では岡山城下の様子を解説し、1 階には体験コーナーが設けられていた。火縄銃や刀を実際に持つことができたり、実物大の馬の模型や大名駕籠に乗って写真を撮れるように工夫がされており、実際に使われていたものに触れながら当時の武士や大名について学習することが可能になっていた。解説パネルだけではなく、刀剣や甲冑の展示もあり、見応えがあった。

また、城外にも見どころが多くあり、中でも重要文化財に指定されている月見櫓は 1620 年代に池田忠雄が築いた実物で見応えがあった。月見櫓は本丸の裏・北西方向を守る櫓である。城外側からみると 2 階建だが、城内側からみると 3 階建で、一番下の階は土蔵となっている。城外側には、鉄板で覆われ下部に石落のある出窓があり、敵を監視、迎撃するための軍備を高めていた。城内側では最上階に高欄と廻縁（手すりと縁側）があり、天井板も張られて、月見櫓の名のとおり風格を高めた造りとなっていて戦国時代の終わりにあたり和戦両様の特徴を持った櫓といえる。月見櫓につながる北と西の石垣の最上段には、内側から鉄砲で狙い撃ちするためのすき間がくりぬかれた銃眼石があり、櫓と一体で軍備を高めていたとされている。それと同時に四季の眺望を楽しみ、小宴を催すために設置されたとも伝わっており、城主が月を眺めるために使用していたことから、「月見櫓」と呼ばれるようになったとする説がある。さらに、本丸入口付近にある石垣は鏡石と呼ばれ、造られた当初の姿を残している貴重な歴史的資料である。城主の威厳や権力を誇示するために巨石が用いられている。最大で高さ 4.1m、幅 3.4m で、厚みのない板石を立てたもので、池田家が城主となった頃に築かれた。昭和 9 年（1934）の室戸台風による洪水被害の水位が示されている。このように、戦災を免れて、創建当初の姿のまま今に受け継がれている建造物も多く存在しており、当時の築城技術を間近で見ることができる貴重な場所であると思った。

実際に訪れてみて、再建された岡山城は博物館としての役目を担っており、周辺地域の歴史だけでなく戦国から江戸にかけての歴史の移り変わりを学ぶことができる施設であり、上手く文化財を観光活用している場所ということが分かった。

### 岡山県を訪れて：河村萌花

今回神田ゼミでは岡山に行き、様々な芸術品を鑑賞した。特に大原美術館と岡山城が印象的だった。

大原美術館の展示室はモネやエル・グレコなど世界

的名画が展示されている本館、日本の近代的洋画や現代アートが並ぶ分館、陶器など東洋の古美術が展示されている工芸・東洋館の 3 館あり、自分の興味がある館から回ることが出来る。大原美術館は昭和 5 年（1930）に設立された大原美術館は、実業家大原孫三郎の支援の下に洋画家児島虎次郎が収集した、近代を中核とする西洋美術作品を出発点としている。その後、コレクションは西洋の現代美術、日本の近現代美術、民芸運動ゆかりの作家たちの作品へと範囲を拡大していった。そして、日本人の心情に裏打ちされた独特の個性を発揮するユニークな民間総合美術館として世界に知られるようになった。現在、本館では特別展「異文化は共鳴するのか？大原コレクションでひらく近代への扉」が開催されている。大原美術館の所蔵品は 19 世紀後半から 20 世紀前半の近代美術が多い。本展覧会は、大原美術館独自の近代美術再検討、文化交流の視点にそった新たな展示、作品と資料により時代相の再現という手法によってこれらの近代美術を再検討しようという試みである。私が一番印象に残った作品は「イル＝ド＝フランスのトルソ」である。トルソは、古代彫刻が発掘された時に不完全な形であったことに由来するものである。途中で途切れていることにより、一層裸体美が強調されている。また、その途切れた先のポージングを自分自身で想像することができることも魅力の 1 つである。表面から肉体の柔らかさ、女性らしい腰の曲線美、背中から臀部まで流れるような輪郭を感じられる作品となっている。

岡山城は豊臣秀吉の指導の元、宇喜多秀家によって慶長 2 年（1597）に築城され、創築から廃藩置県まで岡山城主は 14 代にわたる。宇喜多直家が築いた石山の



岡山城復元天守前での集合写真

城を前身として宇喜多秀家が完成させ、初代城主となる。関ヶ原の戦いにおいて敗戦した秀家が流刑となった後は、小早川秀秋が城主となり改築に取り組んだが、2年足らずで病死し、以後池田家が城主として管理を行った。天守は珍しい不等辺五角形をした3層6階建てとなっている。これは、織田信長の安土城を模したからだと考えられている。黒い下見板張りの外観から、別名「烏城(うじょう)」と呼ばれている。最上階からは後楽園を見ることができる。築城に至るまでに8年の歳月を要した。旭川の流れを変えて本丸の北面から東面を巡らせたため堀の役割を担っていた。昭和20年(1945)の空襲で焼失したが、現在は再建されている。城内は2022年に大改修され、岡山城の歴史について学べる博物館のようになっていた。映像、展示パネル、体験スペースなどがあり見やすい展示になっていた。体験スペースでは五感で楽しむことができ、大人も子どもも関係なく楽しみつつ学ぶことができる。岡山城だけでなく、岡山城一帯の地域がどのように変化したのかなど、地域と密着した展示もあり、参考になる展示であった。

このゼミ旅行を通して、様々な美術品や建築物を拝見でき、大変良い機会だった。この体験を通して、今後のゼミの活動に生かしたいと思う。

### 大原本邸を訪れて：西川大陸

大原本邸は、寛政7年(1795)に創建された。現在に至るまで何度も増改築が繰り返され、江戸時代の情緒を残しながら、明治時代の風情も感じる建造物となり、1971年に重要文化財に指定された。大原本邸では、大原家の歴史とともに近代以降により発展させた大原孫三郎(7代目当主)と大原總一郎(8代目当主)を紹介しており、倉敷と大原家が深く結びついていることがわかった。

大原本邸は美観地区内に位置し、大原美術館を倉敷川で挟んだ向かい側にある。この邸宅は、大原家が元々



大原本邸内にて蔵と建屋の並ぶ光景

繰綿の仲買業や米問屋として財を成したからか門や前庭がなく、入ってすぐに広々とした土間がある。左手には、日本らしく客間と玄関があり、中は、畳敷きで明治時代の家具やピアノなどが置かれていた。現在は、資料館になっているため、そこには、「ふりそそぐ言葉」として代々の当主が残した名言が本の中から浮き出たように演出されていたり、「つみあがる必然」として大原家の家系図と共にそれぞれの代で深く関係した人物が図形化されたモニュメントも飾られていたりした。玄関奥側には、台所があり、プロジェクターを用いて展示もしていたが、一番目に入ったのが、かまどや水場、天井に据え付けられたはしごである。現在の当主に至るまでは、この大原本邸に住んでおり、つい最近まで居住空間として機能していたことが窺われた。

奥側に進むと倉が建ち並んでいた。倉敷は、屋敷の倉が建ち並ぶ場所という意味で倉敷となった通り、たくさん倉が建ち並んでいた。大原本邸の倉は、それらの景色を彷彿とさせる佇まいで倉敷の景観を凝縮させたように感じた。倉の中には、大原家の歴史と大原孫三郎と大原總一郎の略歴と愛用した品々が展示されていた。大原孫三郎は、茶道好きだったことから棗や器などが展示され、大原總一郎は、音楽や文学好きだったことからレコードや書籍などが展示されていた。中倉と内中倉を改装し、展示されていたが、開閉式の窓や漆喰の壁、屋根に一本丸太が取り付けられているなど豪商らしい立派な倉だった名残が残っていた。さらに奥に進むと庭付きの離れ座敷があった。庭には、茶室が設けられていたため、離れ座敷の玄関横に梅見門があった。残念ながら茶室は公開されていなかったため、梅見門をくぐることはできなかったが、飛び石や十三重塔、灯籠などがあり、かなり趣向が凝らされているのがわかった。離れ座敷は、人一人通れるぐらいの細い廊下を渡った先に座敷があり、床間や付書院、違棚などの典型的な書院造であった。しかし、床の間には、元々手紙だったものを掛幅装に仕立て直したのか、饅頭の絵と饅頭の話が記された掛幅が掛けられていたり、長押しに形が異なる千鳥の釘隠しがあったりと遊び心のある座敷になっていた。庭は、座敷に座った時の目線に合わせて作庭されており、木の枝や井戸、飛び石などのものの置き方を工夫することによって奥行きのある庭になっていた。

大原本邸では、初めそれぞれで見学していたが、途中から友人と周るようになってから大原本邸の建物の仕組みだったり、離れ座敷の庭の作庭の工夫だったり一人では、気づき得なかったことを気づくことができ、より理解を深めることができた。とても学び多い旅だった。

### Ⅲ 文化財科学（北野ゼミ）夏季研修旅行の報告

2024. 9. 3～9. 4

#### 文化財科学ゼミの夏季研修旅行の概要

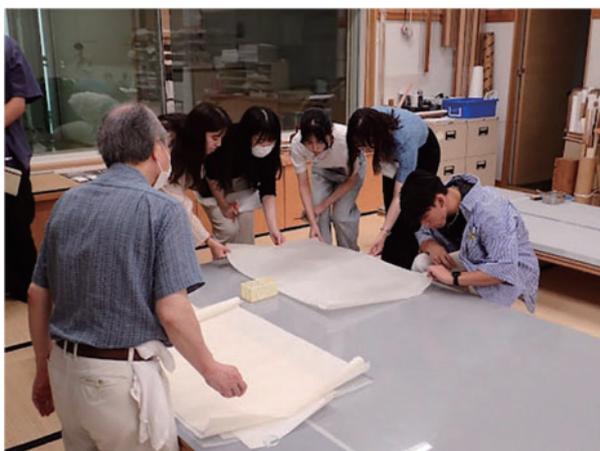
担当教員：北野 信彦

文化財科学ゼミでは、ゼミ生が個人として興味を持つ建築史や美術史、伝統技術の諸分野におけるさまざまな有形・無形の文化遺産の調査・保存修復・活用に関する卒業研究として、主に保存修復科学的(文化財科学・保存科学・修復技術)な手法を用いて取り組む方法が身に着けられるような教育を心がけている。今年度の北野ゼミの旅行は、9月3日(火)～9月4日(水)の1泊2日の日程で12名のゼミ生、さらに本学の文化遺産学専攻の山田卓司准教授とともに合計14名で金沢市内及び周辺地域の文化遺産関連施設を訪れた。今年のテーマは「金沢の文化財保存修復科学の現場を巡る」である。

旅行日程は以下の通りである。まず初日の9月3日(火)は、京都駅もしくは新大阪駅に集合して全員でJR特急サンダーバードから北陸新幹線を乗り継いで金沢駅へ移動した。その後、徒歩にて金沢市が設立したモノづくり大学校において、文化財建造物の保存修復や町並み保存に関する様々な教育プログラムの取り組みのレクチャーを受け、さらには左官・屋根葺き・石組・装こうなどの各工房を見学した。その後、バスにて金沢城や兼六園、さらにはこのエリアには2020年に東京から国立工芸館が移転するなど、多くの博物館施設がある文化エリアに移動して、江戸時代後期の加賀前田家ゆかりの御殿である成巽閣の見学を行った。当時の工芸技術の粋を集めた御殿建造物ゼミ生たちもかなりのインパクトを与えたようである。さらに、徒歩にて石川県立歴史博物館において、野々村仁清作の国宝雉香炉や古九谷コレクションなど加賀ゆかりの美術工芸品の数々を見学した。

2日目は、徒歩にて金沢城の近くに所在する石川県立美術館付属施設である石川県文化財保存修復

工房において絵画修復の現場作業を見学した。この修復工房では、実際の絵画修理が行われており、装こう(日本画修理)技術である和紙・古糊などの絵画修復材料と各種道具、実際の作業風景をまじかで詳しく解説いただくことができた。この工房では、実際の絵画修理が行われており、このエリアは2020年に東京から国立工芸館が移転するなど、多くの博物館施設がある文化エリアである。その後、金沢市立安江金箔工芸館(金箔技術振興研究所)で川上明孝館長から2021年にユネスコの無形文化遺産に登録された「伝統建築工匠の技」17団体の1つである伝統縁付箔の歴史と技術に関する講義を受けた。伝統縁付箔は日光東照宮の修理にも使われるなど、文化財修復に欠かせない材料である。引き続き、展示施設を見学しながら伝統金箔製作の解説を頂いた。午後は、自由見学として、ゼミ生個人が興味ある金沢市内の文教施設を見学して夕方の北陸新幹線から特急サンダーバードで帰路に就いた。金沢は、全国でも珍しく第二次世界大戦で空襲が無かったため古い建築や伝統工芸がよく残る町である。京都と対比される文化都市の金沢であるが、実際の町並みと文化財修理に関する現場をゆっくり見学できた。なお、研修旅行自体はこの2日間の行程であったが、金沢周辺には文化遺産に関係する施設も多い。そのため、個人個人の責任の下、ゼミ生諸君はもう1泊して、自分が特に関心のある施設などの見学を実施して、全員無事に研修旅行を終了させた。なお、個人個人のゼミ諸君らの学んだ内容は、それぞれのレポートにまとめてもらっているが、それぞれ充実した研修旅行となったようである。今回はゼミの研修旅行として9月3日から4日にかけて金沢を訪れた。金沢は歴史ある街であり、寺社や庭園、古くからの街並みなどを見ることが出来る。また龍谷大学のある関西からは離れた北陸地方にあり、



石川県文化財修復工房での日本画修復現場の見学



石川県文化財保存修復工房前での集合写真

気候も違う。そんな金沢で触れた文化財について書いていきたい。

### 金沢のゼミ旅行を通じて：阿江 佐知子

私が今回訪れた場所で一番印象に残っているのは金沢市立金箔安江工芸館である。現在国内で生産されている金箔は殆どが金沢で作られている。こちらの施設では館内の床や洗面台など様々なところに金箔が使われており、また金箔の歴史や製造過程についても分かりやすい展示がされている。今まで金箔というものにあまり触れてこなかった私も金箔に触れるきっかけになり、金箔についての知識・理解を深められたと思う。

金沢における箔打ちは、加賀藩祖・前田利家が文禄2年（1593）豊臣秀吉の朝鮮出兵に従って滞在していた肥前名護屋の陣中から、七尾で金箔を、金沢で銀箔を打つように命じたことから、16世紀末には行われていたことが明らかになっている。金沢での箔打ちがいつから始まったのかは明確ではないが、この頃には既に製造されていたことがわかるのである。

だが16世紀末からずっと箔打ちが続けられてきたかと言うと、そうではない。何故なら長い歴史の中で幕府によって金・銀の箔打ちが禁止され箔打ちの技術が途絶えたこともあったからである。明治になると幕府による生産統制が解除され、金箔は金沢の名産品としての地位を確立するようになる。しかし第二次世界大戦に突入し、金の使用制限令や奢侈品等製造販売制限規則が施行されるなどして箔の生産が困難になり、箔業は壊滅状態、箔職人にとって厳しい時代が続いた。戦争が終わり、徐々に金箔製造が復活する。1950年には朝鮮戦争の特需景気となり、また石川県箔商工業協同組合が成立する。1961年には親鸞上人遠忌で箔の需要が増加した。

昭和から平成にかけて箔の生産金額は上昇していくが、それ以降の長期的な不況の中、箔の生産は減少傾向にあり職人の数も減っていった。明治以降、製箔は世間の好不況に大きく影響されているのである。

このような中、2009年に「金沢金箔伝統技術保存会」が設立され、伝統的な製法で作られる縁付金箔の技術を次の世代へ伝承する動きが興っている。

金箔は、製作用具が1971年に国の重要民俗資料に指定、また1974年に伝統的工芸品産業の振興に関する法律（いわゆる「伝産法」）が施行されると、1977年に「金箔」として指定伝統的工芸材料となっている。現在、金箔には打ち紙の違いによって二つの種類がある。一つは縁付箔と呼ばれるものである。これは、特殊な粘土を混入した手漉きの雁皮紙を灰汁処理した箔打紙によって金箔を打ち延ばす方法である。正方形に仕上げた完成箔を、合紙と称する三桎紙の台紙の上に一枚一枚重ねる時、台紙の寸法が金箔を縁どるように一回り大きいことからくる呼称である。



石川県文化財修復工房の様子

一方、断切箔は、打ち紙としてグラシン紙を用いる製法一般を指している。打ち上がった不定形の箔を大きな合紙と交互に重ねた状態で定寸の正方形に一気に裁断するので、先の縁付箔に対し断切箔と称するのである。この断切箔という技法は金箔の大量生産を可能にしたという点で大きな役割を果たしている。

縁付箔と断切箔にはそれぞれ優れた点があり、現在ではどちらの技法で作られた金箔でも品質に大きな差はない。文化的・歴史的な側面では縁付の技術を残していくことは大切なことだが、断切の技法がなければ、今日のように金箔の文化が広く受け継がれていくこともなかっただろう。どちらの技法の歴史も守り伝えていくことが、金箔を未来に伝えるためには大変重要だと私は考えた。

文化財科学ゼミの夏季研修旅行では金沢を訪れ、金沢で培われた独特の文化とそこで生まれた文化財、そして文化財の修復について多くのことを学んだ。関西とは異なるフィールドで文化財がどのように守り伝えられてきたのかを知ることで文化財の修復保存におけるより幅広い知見を得ることが出来た。また、様々な資料館や整備された街並みから文化財を一般の方にもどのように見てもらうのか、活用につながる観点においても多くのことを学んだ。

### 金沢の文化財修復と和紙：池田 天

今回の夏季研修旅行を通じて常に文化財の修復に関係していたのが和紙である。特に和紙について多くのお話を聞かせていただいたのが石川県文化財保存修復工房である。東京、京都、奈良、福岡にある国立博物館には文化財修復施設が設置されているが、地方自治体としては石川県が初めて設置された。主に装幀部門の修復を行っており、文化財修復の現場の見学や修復に使用される道具、修復方法のパネル展示によって一般の方にも文化財の修復について知ってもらい、身近に感じられるようになっていた。

石川県文化財保存修復工房では文化財修復における様々な場面で場面に応じた様々な特徴を持つ和紙を使い分けていた。和紙は日本で伝統的に漉かれてきた紙の総称で楮や雁皮、三桎などの植物

の繊維を使って手漉きで作られた和紙のことをさす。使用する原料、漉き方、添加物、その他の加工方法によってさまざまな特性を持つ和紙が出来る。文化財修復工房で使用される和紙はその特性を方法で文化財の修復に活かされている。裏打ち紙として使われているのは厚めの楮紙で絹や紙でできた本紙を裏から支えて補強し、形を固定する。楮紙、特に薄美濃紙は肌裏紙として用いられる。胡粉を混ぜ込んで作る楮紙は軸装においては2層目となる増裏、幀装においては2回目、3回目の裏打ちに用いられている。軸装の増裏紙として採用されているものは胡粉を混ぜ込んだ美栖紙である。軸装の中裏紙には柔軟性を持たせるために美濃紙、総裏紙には滑らかな雁皮紙や、雁皮と楮の混合紙などがつかわれることがある。また、総裏打ちとしては表面が滑らかであるだけでなく熱に強く粘り気があり、軸装に仕立て上げたときに狂いが生じにくい白土入りの楮紙である宇陀紙を採用することもある。しかし現在、どの種類の和紙も生産している場所が一か所ずつしかなく、持続可能であるとは言えない。

また、金沢といえば金箔である。今回の夏季研修旅行で訪れた金沢市立安井金箔工芸館で金箔について製造から加工に至るまでを学ばせていただいた。金箔を作る際に使用される箔打ち紙として兵庫県西宮市の名塩で作られている雁皮紙を箔打ち紙に仕立て上げる。しかし現在は雁皮紙をもとに造る箔打ち紙のシェアは20%ほどで80%はカーボン紙を用いているという。箔打ち紙の生産は現在石川県と兵庫県の二か所しかなく安定した金箔の生産のためにカーボン紙は欠かせない。今回の夏季研修旅行では普段の座学では学べない現場の生の声や実際の作業を見て、聞いて、普段学んでいることを実感として学ぶことが出来た。本稿で言及した和紙はもちろんその他にもさまざまな伝統的な技術や材料が失われようとしている現状があって文化財修復において無視できない課題の一つであることを改めて強く認識した。

### 伝統技術の継承：木下 珠里

今年の1月、能登半島で非常に大きな地震があった。メディアではより被害の大きかった、輪島塗で有名な輪島市などが取り上げられることが多く、金沢は被害が小さかったと聞いていたため、自分の中では遠くの出来事として少し意識が薄れつつあった。しかし今回、ゼミ研修旅行で金沢城公園を訪れ金沢城の石垣が一部崩落しているのを目の当たりにし、能登半島地震で金沢の文化財も被害を受けたことを実感した。そこで本レポートでは地震による金沢城公園の石垣への被害と石垣積みの技術から伝統技術の継承について考えた。

金沢城跡は2008年に国史跡に指定されており、「石垣の博物館」とも呼ばれ、時代・場所ごとに積み方の異なる様々な石垣が残っている。しかし、1月に発生した能登半島地震により被害を受け、壁面が膨らむなどの変形が23か所、崩落が5か所で



崩落した金沢城公園の石垣

確認された。崩落した5か所のうち江戸時代に積まれた石垣は地震前からゆがみがみられた大手門口の石垣のみで、残る4か所のうち3か所は明治時代に陸軍によって組み直しや積み上げがなされた石垣、1か所は昭和戦後に積まれた石垣であり、近代以降に積まれた石垣の崩落が多いことがわかる。これら近代以降に積まれた4か所も地震前から変形がみられていたようだ。石川県金沢城調査研究所は「明治期以降は穴生の技術や知識が継承されておらず（石垣の）ポテンシャルが低い。今回はそれが崩れた」<sup>(1)</sup>と説明している。

テキストボックス1583年に前田利家が入城して以降、金沢城はたびたび火災や地震に見舞われたが、当時加賀藩にはお抱えの職人である穴生がおり、火災や地震被害に対する石垣の修築が繰り返し行われてきた。ところが、江戸時代頃から築城や修繕・改修の制限により徐々に石垣積みの技術は衰退していき、明治期に入ると廃藩置県で藩がなくなり、それとともに穴生もいなくなっていったようである。金沢城の石垣について、その来歴や秘伝技術については穴生・後藤家が残した『後藤家文書』によって知ることができる<sup>(2)</sup>ようであるが、現在唯一穴生の技を継ぐのは江戸時代初期の阿波屋喜兵衛を祖とする会社組織である株式会社栗田建設のみである。文化財の石垣の修復には高度な知識・専門技術・伝統技術を身につけながら、安全性の確保や耐震性の向上の観点から現代の工法も柔軟に取り入れることができる石垣職人が求められるが、そのような文化財を修復できる石垣職人は不足している<sup>(3)</sup>といわれている。また、唯一穴生の技を継ぐ栗田建設の15代栗田純徳さんによれば、穴生の技は現場に出なければ上達する術のない技術であるが、新規の仕事は少なく、穴生積は丈夫で長持ちであり修復も減多に発生しないため、次世代への技術の引継ぎが課題<sup>(4)</sup>のようである。

今回の研修旅行の1日目に見学させていただいた金沢職人大学校で伺ったお話によれば、石工は瓦葺職人や畳職人などと同様に、昔ながらの日本家屋が減少して需要が少ないために職人の数が減少しているようだ。金沢職人大学校では「金沢に残

る伝統的で高度な職人の技の伝承と人材の育成」<sup>(5)</sup>が行われているが、現在石工科を含めていくつかの科で定員を下回っている。文化財の修復には伝統的な技術だけでなく、文化財修復の理念や方法なども知っている必要があるが、今後さらに需要が減少すると伝統的技術を受け継ぐ職人の減少が予想され、文化財を修復できる職人の減少につながる。これまで後継者育成や修復材料・道具の確保にばかり目を向けていたが、文化財修復を担う職人の生活にかかわる需要の増加も考えなければならない問題であると感じた。

#### 【註】

(1) 東京新聞「新しい石垣ほど被害が…能登半島地震で分かった江戸期のスゴい築造技術 金沢城再現と耐震の両立へ検討開始」 2024年5月  
<https://www.tokyo-np.co.jp/article/326263> (閲覧：2024年9月)

(2) 金沢城公園ホームページ  
<https://www.pref.ishikawa.jp/siro-niwa/kanazawajou/> (閲覧：2024年9月)

(3) 建設通信新聞DIGITAL「【石垣の保存技術 後世に】城郭考古学者・奈良大教授 千田嘉博氏」 2022年12月  
<https://www.kensetsunews.com/web-kan/770162> (閲覧：2024年9月)

(4) 中川政七商店の読みもの「「穴太衆」伝説の石積み技を継ぐ末裔に立ちほだかる壁とは」 2019年10月  
・<https://story.nakagawa-masashichi.jp/102328> (閲覧：2024年9月)

(5) 公益社団法人 金沢職人大学校パンフレット

### ゼミ旅行レポート：坂元 美天

9月3日と4日に行われたゼミ旅行で、私たちは石川県金沢市に訪れた。初日は金沢職人大学校と成巽閣を訪れ、2日目に石川県文化財保存修復工房、そして金沢市立安江工芸館を訪れた。2日間の見学を通して金沢の伝統的な文化財の魅力や、修復技術を学んだ。中でも印象に残っているのは成巽閣である。今回は成巽閣を中心に振り返りたいと思う。



成巽閣入口

成巽閣は、昭和13年に旧国宝、昭和25年に重要文化財に指定された、江戸時代末期に前田家13代齊泰が母堂にあたる12代奥方、眞龍院(鷹司隆子)のために造営した奥方御殿である。2階建ての寄棟造りであり、階下は対面所としての「謁見の間」を中心に御寝所としての「亀の間」、御居間としての「蝶の間」などの大名家に相応しい風格と奥方らしい優雅さを備えた書院造りである。前田家が育んできた美術、工芸、文化を今日に伝える唯一のものであり、また、大名家奥方という女性のための建造物として貴重な事例であるとされている。

謁見の間は、加賀百万石前田家を象徴する御対面所として使用され、花鳥の欄間を境とし上段、下段18畳からなり、広間33畳へと続いている。私が謁見の間で印象に残っているものは欄間である。謁見の間の欄間は、檜の一枚板を両面陶彫とし、古木と椿に極楽鳥が極彩色の岩絵具で描かれており、加賀の名工武田友月の作といわれている。木目や羽毛、葉脈などの細かな部分が繊細に表現されており、高い技術力を実感することができた。また、極彩色で描かれているため、離れた場所からでも欄間の存在感は大きく非常に魅力的であった。また、この木工技術のひとつは井波の欄間として今日も継承されている。

階上にある群青の間は、格式のある階下の書院に対して意匠を凝らした数寄屋風書院造りである。群青の間とそれに続く書見の間は、階上における最も重要な空間であった。天井を折上天井とし、杉の柂目を目違いに張り、蛇腹及び目地には西欧より輸入された群青(ウルトラマリブルー)の顔料が用いられている。天井の群青から壁に朱を用いた色鮮やかな部屋である。群青の間は金沢を訪れる以前から知ってはいたものの、実際に訪れてみると群青の天井に衝撃を受けた。階下の部屋と比較してみるとその違いが顕著に分り非常に興味深い。それまでの「和」の雰囲気から打って変わり、群青の天井や朱の壁の影響からか少し「洋」の雰囲気を感じた。群青の間より続く書見の間も意匠を凝らした数寄屋造りである。群青の間の様に折上天井の蛇腹及び目地には白群青、壁は紫、床壁は鉄砂が用いられている。

つくしの縁庭園は、昭和59年(1984年)に県指定名勝となっており、「飛鶴庭」から続く平庭造りの庭園である。柱のない縁から眺めることができる開放的な庭園であり、雄松、五葉松、八汐、楓、紅梅等が配され、その合間を辰巳用水から分流された遺水が緩やかに流れている。対して万年青の縁庭園は、つくしの縁庭園とは対照的に大小の築山が造られており、古木を配している。また、遺水は深くなり、下流には落差によって水音が響くよう工夫されている。どちらの庭園も緑の木々が広がっており、とても開放的で落ち着いた雰囲気であった。

今回のゼミ旅行で金沢の文化財について知見を広げることができた。中でも成巽閣の内部構造に

ついて関心を抱いた。今後も様々な文化財や修復技術について学びたいと思う。

#### 【参考文献】

- ・成巽閣パンフレット
- ・成巽閣 <http://www.seisonkaku.com>

### 金沢での夏季研修旅行を終えて：尻池 千紗

今回9月に実施された夏季研修旅行において、私は石川県の金沢を訪れた。ここは金箔や九谷焼、加賀友禅といった伝統工芸技術や、兼六園や金沢城といった文化財などが数多く残っている町である。私自身はこれまでに訪れた事は無く、どんなイメージがあるかと聞かれても上記したような伝統工芸や文化財が浮かぶほどでしかなかったが、今回は夏季研修旅行という文化遺産学専攻に所属する者として文化財の保存修復や伝統的技術を次世代に繋いでいく取り組みを学ぶという観点での見学であった為、単なる観光とは違った見識が広がったように感じている。

そんな一連の見学の中で特に私の印象に残った点が2つある。1つ目は、金沢職人大学校である。ここは、1996年に伝統的かつ高度な職人の技の継承及び後継者を育成していく事を「歴史に責任を持つ」という考えのもとに実行するべく設立された施設である。石工科、瓦科、左官科、造園科、大工科、畳科、建具科、板金科、表具科といった多種多様なコースは勿論印象的であったが、受講生である職人たちの授業参観や謡及び能楽、お茶会といった文化を体験し最終的には発表会を目標とした授業、市民向けの公開講座、子どもたち向けのマイスタースクールといった取り組み等には驚かされた。ただ技術を今この時現役の世代に指導していただくだけではなく伝統的な文化にも触れてもらう事、市民の方々に取り組みを体験及び知ってもらう事、子どもたちにとって少しでも次世代の担い手になる事が将来の選択肢となるように楽しみながら学んでもらう事といった、多角的な取り組みを同時に実施していたからである。この施設が金沢の歴史や文化財を支え守っていくという課題の為、様々な積み重ねを工夫しながら行っているという事がよく分かった。2つ目は、成巽閣である。ここは1863年に当時13代藩主であった前田齊泰が母である真龍院の隠居の為に建てさせた場所である。金沢城から見て巽の方角（現在でいうところの東南）に位置している事からこの名がつけられたとされている。この場所を見学するにあたって事前に特集された映像などを視聴する機会があったが、実際に訪れて自分の目で見てみると、それは想像以上であった。謁見の間の欄間や2階にある群青の間の天井といったはっきりと目につく場所は勿論の事、至るところにある釘隠や障子の腰板に描かれた亀、蝶、貝、土筆、莖といった絵の数々、オランダ渡来のギヤマン、庭がよく見えるように柱を極力つけないようにした構造等、通常であればそこまで注視するような場所ではない部分であっても、非常に細やかな意匠や華やかさが

詰まっており、晩年や余暇を過ごすにはこれ以上ないといえるような、心が落ち着く空間であると強く感じた。以上のように今回の夏季研修旅行では今まで学んできた事はまた一味違う、文化財を後世に残していく為の技術者たちの育成や伝統的な金箔についての資料館を始めとした様々な施設や文化財を多く見学する事が出来た。どれも非常に興味深く、初めて目にするようなものばかりで、京都とは異なるとても貴重な経験を得る事となった。また機会があれば再び訪れ、その歴史や文化に触れたいと思う。

### 夏季ゼミ旅行レポート：鈴木 さくら

夏季に行ったゼミ旅行では石川県金沢市にある職人大学校・成巽閣・石川県文化財保存修復工房・金沢安江金箔工芸館などに訪れた。金沢市独自に文化財を継承していくためのシステムが充実しており文化的に非常に重要な場所である事を学ぶ事ができ、非常に貴重な機会となった。中でも印象に残った成巽閣の対面所である謁見の間と西本願寺の対面所との比較を行い、その違いについて述べていく。

成巽閣は、13代目藩主である前田齊泰が母である真龍院の為に造立した隠居所である。成巽閣の謁見の間は上段の間18畳、下段の間18畳で広間33畳へとつづく公式のご対面所である。上段は天井が折上格天井で格縁は黒漆塗りで杉の鏡板を柂目に張られている。また、正面に床の間と違棚を並べ、左右に付書院と帳台構を対峙させた本格的な書院造りとなっている。下段の天井は格天井で格縁は上段と同じく黒漆塗りだが杉の鏡板は柂目と杢目を目違いに張られている。上段と下段の境の檜の一枚板は花鳥を透かし彫りにしたもので、極彩色の岩絵具で彩色が施された加賀の名工武田友月の作といわれている。材には色漆、壁は金砂子の貼壁、障子の腰板には花鳥の絵が施されており華麗で潇洒な造りを特色としている。遺された数少ない大名の書院建築の中において、さらに類例の無い奥方の御殿である。実際に見学をしてみて成巽閣の謁見の間の上段の床には赤色の絨毯が敷かれていたり、欄間のお花や御簾の簾房にも赤色が使われていたり意識的に暖色を使用されているように感じた。また、成巽閣は上段と下段の距離が近く包み込むような親近感を感じさせる作りである。

西本願寺は、鎌倉時代中頃に親鸞聖人によって開かれた浄土真宗の総本山の寺院である。西本願寺の対面所の鴻の間は寛永年間の造立で本願寺の書院でご門主との対面に使われた一番規模の大きい広間である。上段中央には間口の広い床、左端に帳台構、右端の上々段には違い棚があり付書院がある。このように正面に一列に並べているのは御堂の形式を模しており、本願寺独特の意匠である。さらに、上段正面に欄間に雲間を飛ぶ鴻の透かし彫りがあることが鴻の間という名称の由来となっている。下段には、162畳のかなり広めな座敷を2

列の柱で3つに分けられている。個人的に見学に訪れた時には、金色が基調とされているためかなり豪華絢爛で威厳を感じさせるようなデザインであった。また、天井がかなり高く広間も広いために上段が遠く感じられて暖かさよりも冷たさを感じさせられた。西本願寺の対面所は上段と下段の距離が遠く上下関係を感じさせるような作りである。

成巽閣の対面所と西本願寺の対面所の比較を行い、上段から下段に与える印象が一番違いがあるのではないかと考えた。真龍院の隠居所である成巽閣に来る人物は上段にいる真龍院と近い人物であると考えられる。一方で、浄土真宗の総本山である西本願寺の対面所に来る人物は上段にいる門主と上下関係のある人物であると考えられる。これらのことから対面所の使用目的の相違によって暖かさのある成巽閣の対面所と冷たさを感じさせるような西本願寺の対面所という対照的なデザインになったといえる。

今回のゼミ旅行では文化遺産を継承していく為の取り組みや仕事をさまざまな角度から学んできたことで知見が深まりとても楽しく有意義な時間であった。この経験を活かして今後の研究に活かしていきたい。

#### 【参考文献】

- ・ <https://www.hongwanji.kyoto/known/history.html>
- ・ 本願寺, 2018, 龍谷山本願寺(西本願寺)公式HP. , 本願寺の歴史, 書院・能舞台 (最終アクセス 2024/10/03)
- ・ <http://www.seisonkaku.com/midokoro/ekken-no-ma.html>
- ・ 成巽閣, 2005, 成巽閣公式 HP. , 謁見の間・成巽閣の見どころ(最終アクセス 2024/10/03)
- ・ 加賀前田家奥方御殿成巽閣パンフレット

#### 金沢での夏季研修旅行について：辻 成実

夏季休暇期間中におこなわれた文化財化学ゼミにおける研修旅行では、石川県金沢市を訪れ、普通の観光旅行では訪れることができないようなさまざまな場所を訪れることができ、大変有意義な旅行になったと感じた。一日目には金沢職人大学校と成巽閣、尾山神社へ行き、二日目には石川県文化財保存修復工房と金沢市安江金箔工芸館、午後以降の自由時間には武家屋敷跡野村家を訪れた。金沢は、江戸時代、加賀百万石の城下町として栄え、歴代加賀藩主の文化奨励策によって工芸などの芸術の技が研ぎ澄まされたことで、独特の美意識を有する伝統文化の世界が開いた都市である。今回のゼミ旅行で訪れたすべての場所で、その職人の技を垣間見ることができた。

特に印象に残っているなかの一つは金沢職人大学校だ。金沢職人大学校は、伝統的で高度な職人の技の伝承と、後継者の育成、市民に職人大学校と高い技術を持つ職人の存在を知ってもらうことを目的として平成8年(1996)に開校された。基本的

技能を習得した上で継続して自主的に研修する意欲のある者が入学資格であるため、まさに職人による職人のための学習の場と言える。石工科、瓦科、左官科、造園科、大工科、畳科、建具科、板金科、表具科の9つの科に分かれており、それぞれ実習を通して高い技術力を磨くことができる。また、金沢職人大学校では小中学生を対象とした、子どもマイスタースクールという事業が行われており、ものづくりを体験し、職人の技や心意気を体感することができるのである。小中学生の頃から、職人と呼ばれる人たちの存在が身近にあり、ものづくり体験ができる環境にあることはとても素晴らしいことだと感じ、これからも金沢の伝統技術を継承していく活動やその参加者がなくなるとはほしくないと思った。印象に残っているなかのもう一つは、成巽閣である。成巽閣とは江戸時代末期、文久3年(1863)に前田家13代齊泰が母堂にあたる12代奥方、眞龍院(鷹司隆子)のために造営した奥方御殿である。華やかな色彩や優美に描かれた花鳥、作庭の意匠など母君への心使いに満ちたこの御殿は前田家が育んできた美術、工芸、文化の粋を総合して今日に伝える唯一のものであり、大名奥方という女性のための建造物として貴重な事例でもある。私が成巽閣で興味深いと感じた所は、つくしの縁と呼ばれる柱の無い長さ20mの縁側のことである。柱が無いことによって庭を開放的に眺めることができるのだが、これは桔木(はねぎ)と呼ばれる長さおよそ10mの松材を2m間隔に屋根に組み入れ梃子の原理を利用することで柱を使わずして屋根を支えているのである。ゼミ旅行に行く前の事前学習でこの縁側のことは知っていたのだが、実際に訪れてみるとその開放感は感動的で、縁側に座って庭園を眺めると心地よい風が吹き、造営された当時を感じることができた。さらに成巽閣の階上には群青の間と呼ばれる部屋があり、ここは天井にウルトラマリンブルーが使われている日本でも非常に珍しい所である。造営当時はウルトラマリンブルーが輸入されたばかりの頃であったと考えられるため非常に高価なものであったであろうが、それが多く使用された天井はまさに圧巻だった。成巽閣には



成巽閣庭園

前田家に仕えていた職人の工芸技術がふんだんに活かされていて、職人の技術の高さや、前田家の美への追及心を窺うことができる文化財であると感じた。

今回のこの夏季研修旅行で、金沢の町並みや伝統文化にふれその美意識や、京都とはまた違う趣深さを知ることができた。自分なりに見て感じて学んだものを今後の研究や仕事に活かしたいと思う。

### ゼミ研修旅行レポート：寺島 涼平

今回、9月3日から9月4日にかけて行われたゼミ研修旅行において金沢の地を訪れ、金沢職人大学校、成巽閣、石川県立美術館、石川県文化財保存修復工房、金沢市立安江金箔工芸館など多くの施設を見学することができた。私は、特に建造物に興味があり、そのため今回の研修旅行において一番注目していたのは成巽閣であり、見学してとても印象に残ったためこの建物についてまとめていこうと思う。

この建物は、江戸時代末期の1863年に前田家13代齋泰が母堂にあたる12代奥方、眞龍院のために造営され、大名家奥方という女性のための建築物として貴重な事例である。最初は金沢城から見て巽の方角にある事、京都の鷹司家が辰巳殿と呼ばれていた事にちなんで「巽御殿」と名付けられたが、大政奉還、王政復古を経た1874年、「成巽閣」という名に改められることになった。敷地は2000坪もあり、建坪は土蔵、長屋を含め現在は500坪ほどある。建物は、2階建て、寄棟造り、柿葺きで階下は公式の対面所として「謁見の間」を中心に御寝所としての「亀の間」、御居間としての「蝶の間」などを備えた書院造りである。一方、階上は鮮やかな群青色を用いた「群青の間」を中心に紫色を用いた「群青書見の間」、「網代の間」など天井、壁、床の間の色彩や材質に意匠を凝らした数寄屋風書院造りの手法がとられている。

この建物には、様々な部屋があるが特に「謁見の間」と「群青の間」が素晴らしく感じた。「謁見の間」は、花鳥の欄間を境とし上段、下段18畳からなり公式の御対面所として使用され、上段の間は、正面に付書院と帳台構を対峙させた本格的な書院造となっている。天井は上段が折上格天井、下段は平の格天井、格縁は黒漆塗りで、杉の鏡板を上段は柂目、下段は柂目と杢目を目違いに張られ、材には色漆、壁は金砂子の貼壁、障子の腰板には花鳥の絵が施されている。欄間は、檜の一枚板を両面陶彫とし、梅の古木と椿に極楽鳥が五彩の岩絵具で描かれており、とても色鮮やかで細かくつくられており技術の高さを感じられた。「群青の間」は、天井は折上天井とし、素材の杉柂を目違いに張り、蛇腹および目地にはウルトラマリンブルーという西欧より輸入された顔料を使用した群青が特異な意匠となっており、また、天井の群青から壁に朱を用いた色鮮やかなお部屋となっている。床の間は洞床と云われる踏込床で、左側

には1畳の板畳が付いている。ここを初めて見たとき、色の使い方が独特でとても驚いた。昔の建物で、ここまでの色の使われ方を見たことがなく、このような使われ方があると知り、とても新鮮で観ていて面白く感じた。他にも庭園やそれぞれの部屋の天井など素晴らしいところがたくさんあり、また訪れてみたいと感じた。

今回のゼミ研修旅行では、多くの歴史的建造物、歴史あるものを後世に残していくために活動している施設を見学することができた。今回、金沢を訪れ歴史的価値が高い建物や技術が多く残っている素晴らしい場所だと学ぶことができ、また、文化財の保存修復をしている工房を訪れ、作業しているところを実際にみることができ、後世に残していくための保存修復の重要性を改めて考え学べるいい機会になった。

### ゼミ旅行レポート：西村 侑花

今年の北野ゼミによるゼミ旅行は9月3日から4日にかけて、石川県金沢市を訪れた。金沢市は、加賀百万石と謳われているように、江戸時代には文化都市として栄えた場所である。また、戦災を免れたことから、金沢市には歴史的景観や文化財が当時の姿のままで多く残されている。本レポートでは、今回のゼミ旅行で実際に金沢市を訪れて学んだことや、特に印象に残ったことを3つ挙げ、述べていく。

まず、印象に残っているのは1日目に訪れた成巽閣である。成巽閣は、江戸時代末期に前田家13代齋泰が母である眞龍院のために建てた御殿である。外観は日本の歴史的な造りをしてしたが、中に足を踏み入ると、華やかで天井に吊るされた可愛いシャンデリアが目に入った。1階の部分にある「謁見の間」は、カラフルな彩色が施された欄間や異国情緒の漂う絨毯、大きなシャンデリアが特徴的で、それらが合わさって、女性らしさを感じられる空間だった。2階に上がると、訪れる前から見るのを楽しみにしていた「群青の間」があり、ウルトラマリンブルーの顔料を用いて描かれた天井を実際に見ることができた。江戸時代からそのままの状態であるにもかかわらず、ウルトラマリンブルーの彩色がとてもきれいに残っており、天井を見つめているだけで、江戸時代にタイムスリップしたかのような気分になった。さらに、素晴らしかったのは建物の内装だけでなく、縁側から眺める庭園にも目を奪われた。成巽閣の20メートルにもなる縁側には柱がなく、「つくしの縁」と呼ばれている。縁側の軒先は「桔木」によって支えられ、庭を開放的に眺めることができるように工夫されている。桔木とは長さ10メートル余りの木材を2メートル間隔に組み入れ、てこの原理で屋根を支えている。これは成巽閣の構造の大きな特徴である。このような工夫によって造られた縁側は、とても落ち着く空間になっており、見学を終えたゼミ生たちは自然と縁側に足を運び、時間いっぱいまでゆったりとした時間を過ごしていた。

金沢市で訪れた場所の中でも、成巽閣は特に印象に残ったスポットである。

2 日目に訪れた「石川県文化財保存修復工房」では、リアルな装演文化財の修復を間近で見ることができた。職員の方に案内していただきながらの見学であったが、その際に聞いた和紙の種類の高さには驚いた。実際に触ってみると、和紙の薄さや手触りは一枚一枚違っており、作り手が違えば、素材や用途まで異なることを知ることができた。一方で、今まで修復に使っていた和紙が後継者不足により、作られなくなったという現状も語っていた。修復作業を行う人材の不足も問題となっているが、修復作業に必要な素材を作る人材の不足も深刻な問題であり、今後の課題であることが分かった。

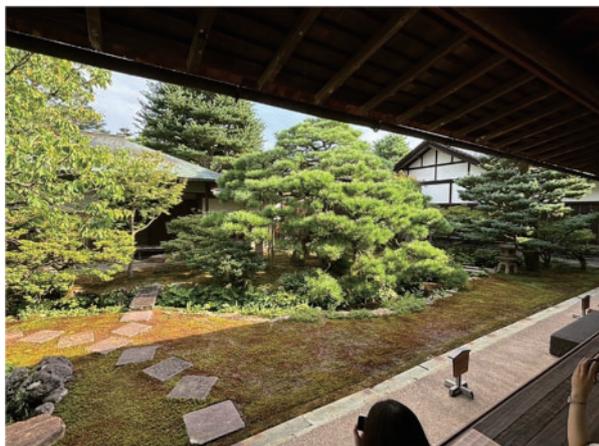
伝統技術の視点では、「金箔工芸館」が印象深い。金沢は、日本の金箔生産量の 98% を占め、昔から受け継がれてきた伝統技術は世界無形文化遺産に登録されている。しかし、伝統技術によって作られた金箔は、全体の約 20% で、その他はカーボン紙から作られているようだ。しかし、どちらの金箔も用途は全く異なり、それぞれの金箔の長所を活かすことのできる場面で使われていることが分かった。

金沢市へのゼミ旅行を通して、多種多様な分野の文化財について学ぶことができた。先述した歴史的建造物や文化財修復、伝統技術はもちろん、他にも歴史的景観や博物館など、これだけの場所をたった 2 日間で、見て学ぶことができた。この 2 日間は間違いなく、自分自身の知見を深める有意義な時間となった。

### 成巽閣欄間について：藤田 勇雅

今回、9 月 3 日 4 日の 2 日間にかけてゼミ旅行が行われ、金沢へと訪れた。ゼミ旅行では、石川県文化財保存修復工房や安江金箔工芸館、石川県立美術館など多くの経験や知ることができた。その中で成巽閣での印象が強く、特に謁見の間の欄間に目を奪われた。そのため成巽閣謁見の間に使われている井波彫刻に焦点を当ててまとめていく。

まず成巽閣について述べると、加賀百万石とし



成巽閣 縁側

ても有名な前田家の十三代目前田齊泰が母のために立てたとされる隠居所とされている。今回は取り上げないが「群青の間」や「ギヤマン」など多くの芸術が施されている建物となっている。また、国の重要文化財に指定されている。

謁見の間の欄間は、前田家御細工所の名工である武田友月によって製作されたと伝わっており、檜一枚の両面彫刻として謁見の間の上段と下段の境に飾られている。梅や椿、極楽鳥のようなかわいらしく、気品のある彫刻が施されている。このように、謁見の間の欄間は武家としての荘厳さを感じる一方、母のことを思い作られたと感じさせる彫刻してある動植物の選びが目に付く。また、実際に現地で見たとときも上段と下段の間その上部にこの欄間があることで上段を華やかに見せていると感じた。また、成巽閣の中全体としても金細工、つくしの縁といった細工よりも謁見の間にあることから目につきやすく存在感を感じた。この謁見の間の欄間は、井波彫刻で彫られています。井波彫刻とは富山県にある井波別院瑞泉寺の再建の際に、前川三四郎から教わった彫刻技術から始まった彫刻である。そのため、現在でも富山県に井波彫刻の総合会館が置かれている。彫刻の始まりが瑞泉寺ということもあり、仏閣彫刻としての特徴がある。また、一般住宅や置物など世俗的彫刻も行っていた。また、今回見学した金沢職人大学校のような次世代の職人を残すため井波木彫刻工芸高等職業訓練校がある。しかし、受講者が少なかったために休校し、現在は井波彫刻塾として一般の方から職人を目指す人まで幅広く学ばれている。このように、井波彫刻は現在にも続く技術として仏閣彫刻または置物彫刻など様々な面を有している。また、この欄間と同じように名古屋城本丸殿上洛殿には井波彫刻で彫られた欄間が存在する。同じ極楽鳥を扱った彫刻が成巽閣と名古屋城それぞれを比較しても、それぞれ欄間の形から構図で似ているところから、違っているところまで見ることができる。成巽閣の欄間は顔料の剥落が起こっているため、本来の華やかさを完全に見ることはできないが、名古屋城の極楽鳥の欄間を見ることで顔料本来の華やかさを想像することができる。

以上のことから成巽閣の欄間は武家としての荘厳さを感じる一方、華やかさや鮮やかさを感じることができる。しかし、顔料の剥落から本来の華やかさや鮮やかさを完全に見ることができない。同じ井波彫刻で作られられた名古屋城本丸上洛殿の欄間から、その色合いの一部を見ることができる。写真と実際に見るとでは顔料の状態や全体像についての印象に違いがあった。修復という相手のいることを学んでいるからこそ実際に足を運んで観察することの大切さを今後に生かしていきたい。

#### 【参考文献】

- ・成巽閣公式ホームページ
- ・<http://www.seisonkaku.com/index.html> (最終

閲覧日 2024 年 10 月 4 日)

- ・井波彫刻協同組合公式ホームページ
- ・<https://inamichoukoku.jp/hall/> (最終閲覧日 2024 年 10 月 4 日)
- ・井波別院瑞泉寺公式ホームページ
- ・<https://inamibetuin-zuisen-ji.amebaownd.com/> (最終閲覧日 2024 年 10 月 3 日)
- ・特別史跡名古屋城公式ホームページ
- ・<https://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/> (最終閲覧日 2024 年 10 月 4 日)

### 金沢ゼミ旅行レポート：藤原 菜穂子

今年度のゼミ旅行にて、私が所属する北野ゼミは金沢を訪問した。9 月 2 日から 3 日にかけて、金沢職人大学校や成巽閣、金沢市立安江金箔工芸館などを見学し、金沢の伝統工芸、そしてそれを生み出す技術について触れることが出来たように思う。

ここでは、2 日目の午前中に見学させていただいた石川県文化財保存修復工房で学んだことについてまとめることとする。

石川県文化財保存修復工房は、石川を中心とした北陸の文化遺産を良好な状態で保存し永く後世に引き継ぐことを目的として、平成 9 年(1997)に石川県立美術館の付属施設として、美術館に隣接した旧石川県庁出羽町分室の 2 階に開設された、地方自治体としては唯一の文化財保存修復施設である。平成 28 年(2016)には旧陸軍第九師団長官舎として建築された建物に隣接して新設オープンしている。

工房を見学させていただく前に、美術館の広坂別館のガイダンス室にてディスプレイで修復作業の工程について解説していただいた。印象に残っているのは、寒糊炊きを紹介する映像である。寒糊は、大寒の時期に炊いた小麦粉でんぶん糊のことで、炊いた糊は甕に入れ、水を張って封をして 1 年寝かしておく。そして 1 年後の大寒の日に、糊に発生するカビを取り除きまた水を張って封をする。この手入れを毎年繰り返し、10 年ほどかけて完成するのが、文化財の修復、特に掛軸や卷子など軸装の巻伸ばしを柔軟に行うための裏打ちに用いら



石川県立美術館 広坂別館

れる古糊である。裏打ちは紙を変えて数枚重ねていくのだが、その際使用する古糊も 1 枚目は接着力が強い新しい古糊を使用し、それ以降は以前作った古糊を使用するそうだ。

次は修復工房見学スペースに案内いただいた。そこは修復作業室がガラス越しながら見ることが出来るようになっており、壁の 3 分の 1 ほどの大きなガラス窓から、実際に修復されている様子を見学した。あのような場所はほとんど存在しないため非常に嬉しかったのだが、中で作業されている方にとっては集中しにくい環境なのではないかと感じた。ガラス越しの見学で終わりと思っていたのだが、修復室の中に入らせていただき、間近で作業を見せていただくことができた。修復室の中は畳敷きになっており、数人の職人さんが作業されていた。ある 1 人の方は、地図が描かれている紙資料の剥落止めを行っていたのだが、お話を伺うと、剥落止めに使用する膠液はすべて同じものではなく箇所や回数によって膠の割合を変えて使用している、ということを教えていただいた。その割合は職人の方が経験などから判断し、時には周りの職人の方にも相談して決めておられるそうだ。また、剥落止めは箇所によっては数回行うこともあるそうで、最初は全体に、2 回目は彩色部分に、その後落ちやすいところがあれば 3 回目を行うこともあると教えていただいた。

修復室の見学で最も印象に残っているのが、修復に使用される和紙についての解説である。使用されているもの全てではないと思うが考えていたよりも多くの種類の和紙を紹介していただき、実際に触ることも出来た。和紙はどれも同じだと思っていたが、お話を伺ってみると、作っている地域によって材料も厚さも異なっており、中にはほとんど向こうが見えるほど透けた和紙も存在した。実際触ってみると、確かに厚さが異なっており、感触も革のようだったり砂のようだったりした。

今回の見学で、文化財の修復は時間をかけて慎重に行われるものだと思えて感じた。これまで座学でしか学んでこなかったため、実際にお話を聞き、触れなければ分からないことがあると知ることが出来た。機会を設けていただいた方々には感謝しかない。見学を通して、今後文化遺産を保存修復の面で守るための方法を学んでいきたいと感じた。

### ゼミ旅行レポート：水上 采音

今回の夏季研修旅行では、9 月 3 日から 4 日にかけて石川県金沢市を訪れた。成巽閣や金沢市職人大学校など見学をした。なかでも、石川県文化財保存修復工房での見学が印象に残っている。

石川県文化財保存修復工房は石川県立美術館の付属施設として 1997 年に開設された。文化財の保存修復施設は国立博物館に設置されている 4 箇所が存在するが、地方自治体の文化財保存修復施設としては石川県が初めてである。石川県文化財保存修復工房では、文化財の調査、保存修復に留まら

ず修復技術者の育成にも取り組んでおり、石川県内のみならず他県からの修復依頼も請け負い、北陸における文化財修復の重要な拠点となっている。

施設内では最初に、映像による修復工程の説明、毎年大寒の日に行っている糊炊きの様子などを解説していただいた。糊炊きでは毎年新しい糊を作成するだけでなく、過去に作成した糊のメンテナンスも行う。修復で使用する糊は新糊を約10年寝かした古糊と呼ばれるものである。糊は1年寝かすと表面にカビが生える。大寒の日にはカビを取り表面に綺麗な水を張り蓋をする。この時、カビを少し残しておくことがポイントだという。完全にカビを取りきってしまうと次年の大寒の日にカビが生えない可能性があるからだ。カビにより糊を発酵させ粘着力が弱くなることで、修復に使用する古糊が完成する。

次に、施設内で修復作業が行われている部屋を案内していただいた。作業部屋はガラス張りの壁になっており外側からでも修復作業の様子をはっきりと見ることが出来た。これほど大きなガラス窓のある修復施設は石川県文化財保存修復工房が初めてだといわれている。室内に入ると、施設の方に修復に使われる紙について説明をしていただき、それらを実際に見て触ることで一つ一つの紙の質感や厚み、色など様々な違いを感じ取ることが出来た。紙は材質や厚みで使用箇所や方法が異なる。また、修復する作品の風合いを合わせるために職人の方にオーダーメイドで紙を梳いて頂くそう。

映像で見た、糊炊きで作成した糊(ふるのり)のサンプルも見せていただいた。カビを生えさせ発酵していたためなのか、少し酸っぱい匂いがした。

また、別の方は、膠を塗り剥落止めをしていた。作品によって様々な動物の膠を使い分け、筆を使い分けている。見学に行った際に修復をしていた古地図は赤、青、黒の3色が使われていたが、青は特に色が落ちやすいため3度も膠を塗り重ねるそう。さらに驚いたのは、膠の温度まで調節をしていることだ。膠は寒いと固まってしまうため、湯煎などをして温めながら使うこともあるが、温かさによって紙への浸透率や速度が変化するため作品ごとに膠の温度を調節して塗布しているそう。

今回の石川県文化財保存修復工房の見学を通して、文化財修復の道のりを辿ることが出来たように思う。目の前で行われる修復作業を見て、技術者の方の話を聞くという非常に貴重な体験から、1つの作品を修復するのに費やす時間と手間を実感した。また、ゼミ旅行を終えて、将来も文化財に関わって行きたいという思いが強くなった。

#### 【参考文献】

- ・石川県文化財保存修復工房パンフレット
- ・石川県文化財保存修復工房ホームページ
- ・<https://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/studio/>



石川県文化財保存修復工房の正面玄関

## IV 福井市周辺の遺跡と関連施設の歴史・考古学的踏査

2024. 9. 05～9. 06

### はじめに

担当教員：國下 多美樹

考古学ゼミでは、普段見学することが難しい遠隔地の遺跡や新設やリニューアルされた博物館を対象に研修先を決めている。それぞれの研究対象の時代をなるべく網羅できるように配慮し、研究に活かすことを目的とする。今年度は、特徴的な中近世の城館跡、山岳寺院跡を中心とする遺跡、博物館が多い北陸の福井市を訪ねた。踏査は、初日はマイクロバス、二日目は電車を利用した。初日は、2年前に開館した一乗谷朝倉氏遺跡博物館、および一乗谷朝倉氏館跡の見学をメインとして、周辺の遺跡、寺院跡の見学を盛り込み、二日目は近世福井城と福井市歴史博物館、王山古墳群の踏査を行なった。

行程：9月5日（木曜日）8:20 京都駅に集合。8:41 発 JR 特急サンダーバード 7号に乗車。敦賀駅で北陸新幹線つるぎ8号に乗車、10:06 JR 福井駅に到着した。早速、マイクロバスに乗車。約30分で永平寺に到着した。永平寺は、比較的参拝客が少なく、ゆっくりと伽藍を見学できた。デジタル映像を駆使した修行僧の生活も鑑賞する。永平寺より移動、昼食をとって平泉寺白山神社に向かう。福井平野から九頭竜川を東の上流へ遡ること約80分である。車一台やっと通れる山道を進むと白山神社の立派な石階段が見えてきた。下車して山道を進む。登りつめたところに本堂など伽藍を見学し、右手に迂回して中世の坊舎が残り発掘された場所を見学、中世の石組み、加工段、復元された築地と門を見学した。ちょうど、史跡の石垣整備に伴う調査が進められており、その状況などについて、藤本康司氏（勝山市教育委員会）にご案内いただいた。以上、



福井駅バスターミナルを出発する一行



藤本康司氏と共に

約40分の見学後、一乗谷朝倉氏遺跡博物館へ移動、一乗谷朝倉氏館跡を見学後、福井駅前に戻り宿泊、夕食を兼ねた情報交換会を行なった。

9月6日（金曜日）は10:00 ホテル出発。徒歩で福井城、および福井市立郷土歴史博物館見学へ。文献史料中心で考古資料はやや控え気味ながら古墳時代の重要遺物を見学できた。徒歩で、福井城の縄張り、石垣、天守を見学後、昼食。福井駅からハピラインふくいに乗車、鯖江駅で下車し、王山古墳群を見学した。見学後、敦賀駅に移動、16:13 特急サンダーバード大阪行に乗車、夕方、京都駅着。解散した。

研修に伴う資料調査、報告書の執筆分担は、福井平野の環境と歴史（真鍋）、永平寺の沿革（寺矢）、立地と伽藍（原田）、白山平泉寺の沿革（大下）、山岳寺院の石垣（齊藤）、一乗谷朝倉氏遺跡博物館（中野）、一乗谷朝倉氏遺跡（濱口）、福井市立郷土歴史博物館（高垣）、福井城（藤枝）、王山古墳群（永立）である。

以上、2日間の研修旅行の成果は、専門分野のみならず他地域、他時代の遺跡や歴史の特徴をフィールドワークで読み取ることができた点で、歴史・考古学的方法を経験できたものと評価する。そして、何よりも考古ゼミ生相互の理解と交流が図られたことはゼミ担当者の喜びでもあった。各自が今後の調査、研究過程に生かされることを期待したい。

### 福井平野の環境と歴史：真鍋倅生

本稿では、福井平野の歴史と環境についてまとめていきたい。

福井平野は、福井県の北部に位置し、古くから日本の農業・文化の発展に大きく貢献した。この平野は、

気候が温暖で豊富な水資源を持つことから、稲作を中心とした農業が盛んに行われ、古代から現代に至るまで、経済的にも文化的にも重要な地域である。移動中のバスや車窓から見るとどこまでも続く平坦な土地と大規模な水田の景色は、非常に見応えのあるものだった。

この福井平野における歴史は縄文時代から始まり、多くの歴史の変遷を経てきた。縄文時代には、福井平野一帯で狩猟や採取を主とした生活が行われていた。若桜町にある鳥浜貝塚や福井市にある佐野原遺跡などからそのような性格が窺える。弥生時代に入ると、稲作が導入され、福井平野の湿潤な土地は水田稲作に最適であったため、この地域の農業が急速に発展した。また、日本海に面した立地を活かして朝鮮半島や中国大陸との交流もあり、特に技術や文化の伝播が行われた。これらの性格は、福井市にある三郎丸遺跡や西谷遺跡などから窺える。

平安時代から中世にかけて、福井平野は交通の要衝として、経済的にも戦略的にも重要な地域であった。特に戦国時代には、戦国大名の朝倉氏がこの地域を拠点とし、一乗谷に大規模な城下町を築いた。朝倉氏は、政治、経済、文化の面でこの地域を発展させ、一乗谷は「小京都」とも呼ばれるほど繁栄した。しかし、天正元年(1573)に織田信長によって朝倉氏が滅ぼされると、この繁栄も終焉を迎えた。

江戸時代には、福井藩が設立され、福井平野は藩の中心地として発展した。往時の姿は、福井城の天守や石垣にわずかに忍ぶことができる。福井藩を治めた松平家は、幕末の動乱期において重要な役割を果たした。藩主の松平春嶽は、幕末の改革派大名として知られ、西洋技術の導入や藩政改革を推進した。また、福井藩は学問や文化の発展にも力を入れ、多くの優れた人材を輩出した。

明治維新後、福井平野は近代化に向けた重要な地域として発展を続けた。特に繊維産業がこの地域で盛ん

になり、福井市は日本国内でも有数の繊維産業の中心地となった。また、交通インフラの整備により、他の地域との交流もさらに活発化し、経済的にも大きな成長を遂げた。

第二次世界大戦後、福井平野は戦後復興の一環として急速な発展を遂げたが、1948年の福井地震や豪雪などの自然災害に度々見舞われた。それでも地域住民の協力と努力により復興が進み、現代に至るまで持続的な発展を続けている。農業・工業・商業がバランスよく発展し、現在では北陸地方の重要な経済圏の一部となっている。

福井平野は日本海に面し、温暖な気候と越前三大河川と呼ばれる九頭竜川・足羽川・日野川を持つことから、稲作が古くから発展した。今日でも、稲作を中心とした農業は続いており、自然環境と調和した形での発展が進んでいる。私は九頭竜川・足羽川・日野川の存在は、豊かな自然環境と人々の生活を繋ぎ、長い歴史の中で地域社会の基盤を形成してきたと今回の研修旅行を通して思った。これらの川が流れる風景は、福井平野の美しい自然環境と歴史的背景を象徴するものであると言える。福井平野の豊かな環境は、未来に向けての発展にも大きな影響を与え続けていくであろう。

#### 【参考文献】

- ・福井県史通史編1～6巻 福井県 1994年
- ・角川日本地名大辞典〈18〉福井県地誌編・資料編 角川日本地名大辞典編纂委員会 角川学芸出版 2009年

### 道元禅師の成り立ちと永平寺の文化財:寺矢拓斗

2024年9月5日に私たちは研修旅行として福井県永平寺町に位置する曹洞宗の永平寺を訪れた。永平寺の境内に入ると、目の前には多くの大木が並び立ち美しい自然の景色や歴史を感じさせる建物が広がっていて、非常に落ち着いた空気感があり、坂道を登っていくと自然と穏やかな気持ちになった。

永平寺は曹洞宗の大本山として知られており、創建は寛元2年(1244)で、道元禅師によって開山された。道元禅師は当時の日本における禅宗の発展に寄与した人物であり、彼の思想や修行方法は、後の曹洞宗の基盤となった。道元禅師は、宋から帰国した後に、自己の修行と禅の教えを永平寺で広め、彼はここで只管打坐という坐禅の実践を中心に据えた教えを推進し、多くの弟子を育てたとされる。永平寺は道元禅師の教えを受け継ぐ僧侶たちの修行道場として、また信者達の精神的な拠り所として発展した。現在までも永平寺は全国から集まった多くの修行僧達が厳しい修行を日々行っている。



福井平野



永平寺 回廊

永平寺は非常に長い歴史がある建物であり、貴重な国宝や数多くの重要文化財があり、国宝では、道元禪師が自筆で書かれたとされ普勧座禅儀があり、この書物は道元禪師が座談の意味や作法などについて記した書物で、普勧座禅儀の名称はあまねく人々に座談を勧めるという意味がある。重要文化財では本堂を安置する重要な建物で修行の根本となる座談や食事、就寝などを行う伽藍である仏殿や、寺院の入り口を示し、七堂伽藍の中でも最も古い寛延2年造立の建築物である山門、修行僧が座談を行うための施設である禅堂、日本曹洞宗の発祥の根源として、道元禪師を奉祀する曹洞宗の聖地とも言うべき場所である承陽殿や正面に韋駄尊天が祀られている大庫院などがあります。このように永平寺では多くの建物が重要文化財に指定されているが、それらの建物を保全するためのデジタルデータが十分に残っていないとして、正確なデータをとるためにデジタルデータを導入した。測量機器を使うことで、レーザーが対象となる物の大きさや形などを正確に捉えることができるという。これまでは直接巻き尺を当てて測量して長さを測ったりしていたとされるが、測量機器により、貴重な文化財に触れる回数を減らすことができるとともに、計測したデータから文化財の保存を担う現在の宮大工の技術の向上にも繋が



永平寺 天井絵一部

り、文化財をより未来に残すことができるようになったとされる。

永平寺では坐禅やお勤めだけではなく、私たちが普段生活する上で当たり前としている、食事をする、お風呂に入る、寝ることなど、全てを仏道修行とすることが分かった。坐禅やお勤めも大切ではあるが日常生活の全ての行いを自分自身によって修行として見出し、また実践することこそが道元禪師の教えであり、それこそが修行場として永平寺が多くの人々に親しまれていると感じた。

今回永平寺を訪れたことで実際に現地に行かないと知ることができない、迫力のある建物の静寂な空気感や境内の心が穏やかになる自然の美しさを体感することができた。立地的には俗世と距離があるがどこか親しみやすさを感じ、映像のみで詳しくは見るができなかった修行の様子やよく回れなかった敷地内にある建物を再び見に行きたいと思った。

#### 【参考文献】

- ・永平寺の起源 <http://zen-eiheiji.jp>
- ・大本山永平寺 <http://daihonzan-eiheiji.com>

#### 曹洞宗大本山永平寺の立地と伽藍配置について ：原田しいな

2024年9月上旬に、研修旅行の一環で福井県吉田郡にある曹洞宗大本山永平寺を訪れた。永平寺に到着し足を踏み入れると、数多くの老杉や自然に囲まれた緑豊かな地形と、歴史ある寺院の建造物が一体化した景色が広がり、自然と心が惹かれた。

永平寺は寛元2年(1244)に道元禪師によって創建されて以降、度重なる焼失に見舞われ再建や修復を繰り返しており、現存する諸堂は近世から近代にかけて整備されたものである。33万㎡もの広大な敷地には70を超える諸堂があり、19の建造物が国の重要文化財に指定されている。また、永平寺は禅宗寺院の典型的なスタイルである、法堂・仏殿・僧堂・庫院・山門・東司・浴室の「七堂伽藍」で構成され、法堂・仏殿・中雀門・山門は順に南に向かって一列に並び、そして仏殿の東側には大庫院、西側には僧堂が配置し、その他の諸堂も廻廊によって連絡しており、創建以来の地形を占めているとされている。「七堂伽藍」の中でも山門は寛延2年(1749)に再建された最古の建造物であり、中国唐時代様式の楼閣門で、両側には仏教守護神の四天王が祀られている。境内には70を超える諸堂があるが、どの建造物も規模が大きく雄大で、見応えや迫力のあるものばかりであり、当時の工人の優れた力量が伺えた。

永平寺の「七堂伽藍」の配置は座禅の姿に例えられることがあり、頭にあたるのが法堂、心臓にあたるの

が仏殿、腰骨にあたるのが山門、両腕にあたるのが僧堂と大庫院、右膝にあたるのが東司、左膝にあたるのが浴司であるとされる。修行に欠かせない場である「七堂伽藍」に、食事を作る場の大庫院や寝起きや食事をとる場の僧堂、お手洗いの東司、浴室の浴司が含まれていることから、日常生活全てを修行と見出していることが伺える。

私が永平寺を訪れて、最も印象に残っていることはやはり永平寺の立地場所である。永平寺の境内は谷沿いの緩やかな傾斜地に位置していることが特徴的で、廻廊の所々には階段が備え付けられており、「山門から法堂まで登って行く」というような感覚であった。このような永平寺の特徴的な地形に対して横山秀哉氏は、臨済宗五山等の伽藍が平地で都市の中心に建設されているのと大いに異なると指摘し、一方でこのような立地の特異性のある寺院は加賀の永光寺や陸奥の正法寺にも認められることから、初期曹洞宗寺院の性格がみられるとしている。永平寺は谷沿いの山肌に沿うようにつくられ自然との一体感を成していることから、より俗世との距離をおいて修行に励むことができ、研修で訪れた私でも現実の世界とは異なる空間で、心の落ち着きを保てるような場所に感じ、道元禅師がこの地を選んだ意味を実感できた気がした。

#### 【参考文献】

- ・「曹洞宗大本山永平寺」パンフレット 大本山永平寺
- ・横山秀哉「越前永平寺の伽藍配置について」『建築史研究/建築史研究会編』(2) 東京彰国社 1950
- ・「永平寺-文化遺産オンライン」『文化遺産オンライン』  
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/search/freetext:%E6%B0%B8%E5%B9%B3%E5%AF%BA>(最終閲覧日 2024. 10. 1)
- ・「七堂伽藍」『曹洞宗関東管区教化センター』  
<https://soto-kanto.net/wp-content/uploads/2021/pdf/radio/230603.pdf>(最終閲覧日 2024. 10. 1)



永平寺 回廊を上から

## 平泉寺白山神社と白山信仰：大下未結

研修旅行1日目昼食の後、福井県勝山市に所在する平泉寺白山神社を訪れた。奈良時代の僧、泰澄によって創建されたと伝わる天台宗の平泉寺が明治の神仏分離により神社となったもので、古くから白山信仰の拠点として栄えた。泰澄は日本の白山信仰をはじめた人物といわれ、養老元年(717)に林泉(平泉寺白山神社御手洗池)で女神から白山へ登るようお告げを受け、白山の頂上に赴き九頭竜王をはじめとする神仏と出会ったことで悟りを得たとされている。同様に石川県白山市の白山本宮、岐阜県郡上市の長滝寺も白山への代表的な登拝口として栄え、これらをあわせて三馬場(さんばんば)と呼ばれている。

平安時代後期には天台宗比叡山延暦寺の末寺として発展し、最盛期の戦国時代には48社、36堂、6000の坊院が建ち並び、寺領は9万石、9万貫、8000人もの僧兵がいたと伝えられ、当時は日本屈指の宗教勢力であったと考えられている。天正年間(1573~1592)に一向一揆の兵火で全山焼失し、その遺構が境内の地中に保存されていたことから白山平泉寺旧境内として平成9年(1997)に中世の境内全域、約200ヘクタールが国史跡に指定された。その後も坊院の門・土塀の復元や発掘地の整備、ガイダンス施設の開館などが行われた。

平泉寺市営駐車場から参道を歩くことおよそ10分で二の鳥居に到着した。両部鳥居といわれる2本の本柱の前後にそれぞれ控え柱が設けられた神仏習合の形式で、中央の額には「白山三所大権現」と書かれている。三所とは白山の御前峰・大汝峰・別山を指しており、鳥居の中央に屋根がついているのはこの額を守るためだという。正面の額には「中宮平泉寺」とあり、江戸時代に作られたという寄棟檜皮葺で、周囲の風景に溶け込みつつ平安時代の風情を感じることができた。

拝殿・南谷発掘現場の見学を終え、参道にある売店と食堂を兼ねた六千坊精進坂店で小休憩をとっていた



平泉寺 二の鳥居

際、お店の方から来年開催される平泉寺白山神社の御開帳の話を知った。33年に一度、平泉寺白山神社御開帳記念大祭と題しておこなわれており、前回の平成4年(1992)には稚児行列、女兒たちによる浦安の舞奉納、ホラ貝を吹き鳴らす僧兵行列が催されたという。今回は令和7年(2025)5月23日に本祭りが開催され、25日までの3日間が予定されている。

小休憩の後、訪れたガイダンス施設の白山平泉寺歴史探遊館まほろばでは、史跡平泉寺や白山の歴史・自然・文化に関する展示がおこなわれていた。平泉寺の歴史を紹介するコーナーでは発掘調査で出土した数十万点の遺物の中から約230点が展示されており、パネル展示とあわせて平泉寺の国内外との交流や都市構造、坊院での暮らしを垣間見ることができた。また、特別展では平泉寺の僧侶と、室町幕府三代將軍足利義満が建立した相国寺の僧侶の記録を通じてみやこと結びつきを紹介していたため、思わぬところで普段学生生活を送っている京都とのつながりを知ることとなった。

平泉寺白山神社はその大部分が焼失したが、開闢から1300年近くたった今もなお人々の白山信仰のよりどころであると窺うことのできる、後世まで伝えられる必要がある存在だと考える。

#### 【参考文献】

- ・平泉寺白山神社 | 福井県勝山市平泉寺 | 平泉寺白山神社 <https://heisenji.jp/> (最終閲覧日 2024/10/01)
- ・阿部来「白山平泉寺の反映と富」『白山平泉寺 よみがえる宗教都市』吉川弘文館 2017

## 中世寺院にみる石垣

### —平泉寺白山神社・法土寺遺跡を中心に—

：齊藤宗一郎

今回、研修旅行で訪れた福井県勝山市にある平泉寺白山神社や同じ福井県に所在し、中世寺院跡である法土寺遺跡をはじめとする中世寺院の石垣について本稿では述べていくこととする。

まずは平泉寺白山神社の石垣を取り上げる。平泉寺白山神社の沿革については、本稿では省略する。2024年9月5日考古学ゼミの研修旅行として平泉寺白山神社を踏査した。その際、南谷にあたる箇所が発掘調査が行われていた。平泉寺の発掘調査は、2008年から2012年に行われて以来12年ぶりに行われていた。前回の2008年からの発掘成果では、中世に使われていた僧侶の居住跡や石畳が発見された。石畳で使われている石は、付近を流れる九頭竜川や女神川の川原石を手渡しで運んでつくられたと伝えられている。また、石垣で使われている石は、山石を切り出して使用している。そして、石垣で使用された石は、自然石や割石で、

平坦面や人為的に張った面を表に出しているという特徴がある。石垣を使用している場所は、段丘崖の箇所、盛土の周りに積み上げられているものが見つまっている。旧境内で発掘された箇所からは、中世の土師質皿、越前焼、瀬戸・美濃焼が出土しているほか、近世の遺物も出土している。つまり、旧境内の石垣は、中世から近世にかけて造られたものであることが分かる。

今回の発掘を担当されていた、勝山市商工文化課文化財活用係の藤本康司氏に話を伺う機会があった。お話の中に、『朝倉始末記』に興味深い記述があると聞き調べた。そこには平泉寺の大石垣についての記載があった。弘治年間(1555~1558年)に平泉寺の諸堂が造営された際、2人の有力な僧が石の大きさを巡り争ったということが書かれていた。その際の巨石は謀反岩として南谷に現在も残されている。他にも、坊跡に残されている石垣の中には、近現代に耕作として使用していたため、当時の石垣を後ろにさげているため石垣の幅間が狭い箇所があるということもご教示いただいた。そして、平泉寺の石垣には裏込めがないということも教えていただいた。石垣の裏込め構造は、名称の問題も含めて自身の研究課題にもつながるお話であった。

今回の研修旅行では訪れなかったが法土寺遺跡について触れておく。この法土寺遺跡に触れる理由は、平泉寺白山神社と同じ福井県に所在し、中世の寺院という点で共通するためである。法土寺遺跡は福井県福井市に所在する縄文時代から16世紀後半にかけての複合遺跡である。城館的な機能を持つ寺院として報告されている。法土寺遺跡の石垣は新旧の2つの時期が存在する。新しい石垣は、旧石垣よりも東側に造られているため東側に拡張されていることが分かる<sup>(1)</sup>。

これらの石垣は盛土の側面に築かれた石垣である。また、五輪塔の火輪が1石転用されていることが確認されている。また、石垣の他にも石積みや石列も確認されている。

今回の研修旅行で平泉寺白山神社を訪れて、中世の



平泉寺 現存する石畳

石畳の上を実際に歩けるといいう貴重な経験ができた。そして、中世の石垣も見ることができて、積み方や石の大きさなど実際にみることができることが平泉寺白山神社の大きな特徴であると感じた。今後は寺院で使われていた石垣技術がどういった集団を通して城郭にもたらされたのかを複数の寺院を取り上げ、研究を行いたい。

#### 【註】

(1)「新しい石垣は旧石垣の東側約3.5mに築かれ、基壇状の盛土が東に拡張されていることが分かる。新石垣は東辺5.8m、南辺1.7m、高さ0.9mを測る。旧石垣は東約5m、南辺約4.3m、高さ0.7mを測る。石材は新石垣より大きめで、直方体に加工されている。」と報告されている。

#### 【参考文献】

中井均「白山平泉寺とその時代―寺・城・館―」『白山平泉寺 よみがえる宗教都市』吉川弘文館 2017年  
福井県教育庁埋蔵文化財センター「福井県埋蔵文化財調査報告 第63集 法士寺遺跡Ⅱ 一般国道416号道路改良工事(国道改修に伴う調査)」2003年  
北垣聰一郎「石垣普請」法政大学出版局 1987年  
中尾堯「中世の寺院体制と社会」吉川弘文館 2007年  
近藤瓶城 編『史籍集覧』第6冊 近藤出版部 1919年

### 一乗谷朝倉氏遺跡博物館を訪れて：中野聡志

考古学ゼミの研修旅行の1日目に福井県福井市にある福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館を訪れた。この博物館は1981年に福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館という名で開館し、戦国時代にこの一乗谷で繁栄した朝倉氏に関する遺物を展示していた。その後、2021年に一年余りの閉館を経て、2022年に福井県朝倉氏遺跡博物館として新築された建物に移転した。博物館の展示は以下の4つで構成されている。遺構展示室、基本展示室、特別展示室、そして朝倉館原寸再現されたフロアであった。



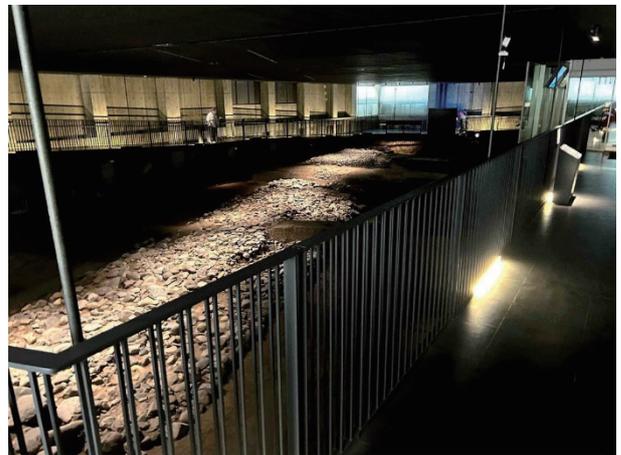
平泉寺 通称苔寺

最初に見学したのは遺構展示室でこの場所は博物館が建設されるときに行われた発掘調査で見つかった石敷きの遺構を展示している。この遺構は一乗谷の川湊として使われた足羽川沿いにあり、船着場や荷の積み下ろしとしての役割があるとされている。石敷きの遺構を屋内で露出展示することは珍しく、新しい展示の仕方であると感じた。そして、一乗谷の玄関口としての役割を持つ遺構が屋外ではなく屋内で展示されていることが非常に興味深かった。

次に見たのは基本展示室でここでは朝倉氏と一乗谷の城下町の歴史について170万点に及ぶ出土品をもとに城下町に暮らす町人や商人、職人などの職業別に関連する遺物の展示がされていた。また朝倉氏は戦国大名としての側面だけでなく、茶器や書画などの文化面に関する遺物の展示もあり、朝倉氏と一乗谷の様子を様々な角度から伺うことができた。そして朝倉氏がこの一乗谷に拠点を置き発展させていった歴史やその後の衰退までの経緯なども詳しく知ることができた。中でも一乗谷の城下町を再現したジオラマでは白や屋敷、街並み、が立体的に再現され、両脇を山に挟まれた狭い土地にたくさんの人と建物があり、一乗谷の城下町の活気を見てとることができた。

最後に見たのは朝倉館を原寸再現したフロアで、朝倉当主の居館の中を歩いて当時の武家屋敷の様子を見学することができた。また庭なども再現されていて、京の都にある貴族の邸宅のような造りを遠く離れた一乗谷の朝倉家の館に伺うことができた。

一乗谷朝倉氏遺跡博物館では人、物、地域といった戦国時代の一乗谷の様子をくまなく知ることのできる場所で、一乗谷という場所が朝倉氏とともに発展していたことを知ることができた。またこの博物館のすぐ近くには特別史跡である一乗谷朝倉氏遺跡があり、ここでは当時の町並みが再現されていて博物館を見学した後、そのまま遺跡まで足を運び城下町のスケールをより一層感じることができた。



福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 遺構展示室

今回の研修旅行で一乗谷朝倉氏遺跡博物館を訪れて、朝倉氏と一乗谷の文化的豊かさと歴史的背景を見て学ぶことができた。一乗谷の歴史のみを扱った博物館だがもっと時間をかけて見学したいと感じるほど展示内容が充実していて素晴らしい博物館だった。

#### 【参考文献】

・福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館 <https://asakura-museum.pref.fukui.lg.jp> (2024年10月3日閲覧)

### 一乗谷朝倉氏遺跡の館跡を訪れて：濱口葵

研修旅行初日の行程の最終目的地として、福井県福井市に位置する一乗谷朝倉氏遺跡の館跡を訪れた。一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏の初代当主の孝景が応仁元年(1467)の応仁の乱での活躍をきっかけに、文明3年(1471)に幕府から越前守護に関する要望を認められ、その後、氏景・貞景・孝景・義景と5代にわたって越前を統治し、1573年に織田信長によって焼き払われまでの約100年にわたって繁栄した遺跡で、戦国時代の城下町全体が遺跡となって残された、全国でも珍しい大規模遺跡である。昭和46年(1971)に278ヘクタールが国の特別史跡に指定され、1967年から50年以上にわたり発掘調査と整備が続けられており、平成3年には遺跡内の4つの庭園が国の特別名勝となった。さらに平成19年(2007)には遺跡からの出土品2,343点が国の重要文化財に指定された。

朝倉当主の館跡をはじめ、武家屋敷や道路などの町並を復原した地区や上・下城戸跡、石仏群の残る寺院跡、標高473mの山上に築かれた一乗谷城跡など、谷全体に多くの当時の生活を見ることができるような遺跡となっている。

遺跡内には当時の町並みが復原されたゾーンがあり、約200mにわたる道路に面して整然と並ぶ町並を、発掘調査で見つかった塀の石垣や建物礎石をそのまま用いて、出土品に基づいた再現が忠実にされている。この地区は上級武家屋敷群・中級武家屋敷群・町家群

の3区画に分けられている。武家屋敷群は、周囲に土塀を巡らし道路に面して門を構え、屋敷内は多くの建物が建てられている。なかでも上級武家屋敷群は山側に位置するが、中級武家屋敷群は谷側に建てられている。上級と中級の武家屋敷では門の構造に違いがある。上級は地面に4本の柱を立てる薬医門、中級は2本の柱を立てる棟門となっており、屋敷の大きさから格式の違いが現れていた。屋敷内に多くの建物が建つ武家屋敷に対して、町家は建物が直接道路に接し、面積が小さく、裏庭に井戸やトイレなどがある単純なつくりとなっていて、短冊状の宅地割であった。

住居の屋根が重石を乗せて作られているのは絵図などを参考に復原されているとされる。一乗谷朝倉氏遺跡の住居では武家屋敷から町家に至るまで、ほぼ各屋敷が井戸を持っており、トイレやゴミ捨て場と考えられている石積遺構、排水溝も多く見つかったことからインフラ整備が完備されていることを見学することができた。また、閉鎖的な武家屋敷と開放的な町屋の違いや、城下町の仕組みとして町並には敵の侵入に備え、先が見通せないように、そして大人数が一直線に攻めてこられないように、道路はまっすぐ延びず、T字路やクランクとなっていることなどが分かった。

復原町並を訪れた後は朝倉館跡を訪れた。ここには朝倉氏5代当主の朝倉義景が暮らした館があったとされており、四方を堀で囲み、西側の山辺を除く三方に土塁を廻らせたつくりで、土塁内側の平坦地には10数棟の建物が建ち並んでいたとされる。現在では礎石を見ることができ、そこから当時の建物の様子が読み取れるようになっている。館跡から長い階段を登った先の湯殿跡庭園からは高い位置から館跡を見ることができ、建物配置が大変理解しやすかった。

#### 【参考文献】

・『一乗谷朝倉氏遺跡復原町並パンフレット』  
・松原信之『朝倉氏と戦国村一乗谷』2017年 吉川弘文館



復原街並みの風景



町家外観 排水溝

・水野和雄・佐藤圭編『戦国大名朝倉氏と一乗谷』2002年 高志書院

### 福井市立郷土歴史博物館を見学して：高垣柚香

研修旅行2日目、朝9時に福井駅近くのホテルを立ち15分ほど歩き、福井市立郷土歴史博物館へとやってきた。福井市立郷土歴史博物館は福井市が戦災と震災から復興した福井市のシンボルとして1953年(昭和28)足羽山に郷土歴史館という名で開館した。この郷土歴史館を前身とし福井市立郷土歴史博物館は2004年(平成16)3月21日福井市宝永、名勝養浩館庭園に隣接する現在地に移転した。館内は「松平家資料展示室」「常設展示室」「企画展示室」の3つの展示室で構成されていて、訪れた際には松平家史料展示室で「ほとけの姿を読み解く」と題した企画展が行われていた。この企画展は日本とチベットの仏教絵画を、何を基にして制作されたのか、また何を表現しているのかを読みとくことを目指した展示となっていた。(2024年10月14日展示終了)

今回私たちは常設展示室をメインに観覧した。常設展示では縄文時代から昭和時代までの福井の歴史を、「ふくいのみやま」「古代のふくい」「城下町と近代都市」「幕末維新の人物」の4つのテーマで構成し展示している。展示室に入ってすぐ「ふくいのみやま」では縄文時代から現代までの福井市の歴史を、資料を中心にして振り返るコーナーが設けられている。福井市の地図や、史料を用いた各時代の出土品が設置されていて古代から福井市の歴史を感じることができた。

「ふくいのみやま」では福井市立郷土歴史博物館のロゴにもなっている「キュンストレーキ」と呼ばれる、フランスの解剖学者オゾーによって考案された紙製の人体解剖模型なども見ることができる。次の「古代のふくい」では「ふくいの古墳」とテーマ付けて福井市内の古墳から出土した副葬品の実物資料を展示し、古墳時代のヒトとモノとのかかわりを探っていくことを



福井市立郷土歴史博物館 外観

目的とし展示している。

実物の展示はもちろん、パネルでの展示、映像展示、復元模型展示など多種多様な展示で分かりやすく、観覧することができる。次の「城下町と近代都市」では【城下町と人々の暮らし】と【近代都市の発展と戦・震災】の2テーマを主に展示している。【城下町と人々の暮らし】では越前松平家の居城「福井城」と半石半木の奇橋九十九橋を中心に、城下町に暮らした人々の歴史を展示している。

九十九橋の原寸大模型や、春の九十九橋周辺の風景を再現した模型、福井城本丸の模型や福井城の城下絵図を焼き付けた陶板など多量の模型が設置されていて、また模型を照らす照明についてもこだわりが感じられる展示であった。【近代都市の発展と戦・震災】では福井市の発展の歴史、そして戦争・震災の被害状況とその復興の歴史を展示している。福井空襲の体験を市内に残された防空壕を中心にして描くアニメ映像や、震災から立ち上がる福井を当時の体験談からふりかえる映像など福井市の復興までの道のりを知ることができる。最後の「幕末維新の人物」では幕末維新期に活躍した松平春嶽を中心に近代都市の発展と福井藩内外の志士たちを写真付で展示している。

福井市立郷土歴史博物館を訪れて、福井市を中心とした郷土史を、多くの模型を通じて学ぶことができた。また縄文、弥生時代の考古資料が少ないように感じたが古墳時代と近代の発展については詳しく学ぶことができた。

#### 【参考資料】

- ・福井市立郷土歴史博物館 パンフレット
- ・福井市立郷土歴史博物館概要

<https://www.history.museum.city.fukui.fukui.jp/gaiyo/index.html> (閲覧日2024年10月4日)

### 王山古墳群を訪れて：永立明利

2024年9月6日、私達考古学ゼミでは研修旅行の一環として、鯖江市にある王山古墳群の見学を行った。本稿では、実際に現地を訪れて体感したことや学んだことについてまとめていきたい。

まず、遺跡の概要について述べておきたい。王山古墳群は独立丘陵「王山」に立地し、現在までに弥生時代から古墳時代中期にかけて築造された計54基の墳墓や古墳が確認されている。出土品の中には、弥生時代後期の近江や尾張で出土するものと同様の特徴を持った土器が確認されており、そうした地域との関連性が推測されている。それ以外にも、多くの地点で平安時代、鎌倉時代から室町時代の遺物が出土しており、のちの時代にも古墳を再び用いて墓を造っていたと考えられている。当遺跡は1928年に発見され、1967年

に国指定史跡に指定されるが、1980年には追加で周辺部分も指定されている。

王山古墳群に向かうために王山を登りながら、私がまず感じたこととしては「景色が良い」ということだった。王山は標高66mであり、木が生えていない開けた場所では周囲の街並みを一望することができる。王山周辺の有力者や指導者、王たちにとっては、自分たちが支配する地域全体を見渡せるという点において、格好の埋葬場所だったのである。現代に暮らしている私からすれば、高い所にある墓など向かうのに時間がかかるだけ無駄だと感じてしまうが、そうした点が当時の人々との価値観の違いなのだろうと考えた。また、今回私達が登ったルートでは、道の左右に古墳と思われる地面の盛り上がりが複数確認され、改めて当遺跡にある古墳や墳墓の多さに驚かされた。

現地は山の中のため、ヘビやハチなどに気を付ける必要があったが、古墳自体とそれに続く道は整備されており、見学に際して支障はなかった。それぞれの古墳の近くには「王山〇〇号墳」という風に標識が設置されており、古墳の把握について迷うことはなかった。

また、古墳の中には遺構復元されたものが多数存在しており、2種類の方法で復元されていた。一つ目は「全景復元」であり、これには2・4・6・7・21・25・40号墳が該当する。遺構面に保護盛土を施した上から植栽基盤層を盛土し、墳頂平坦面は舗装材で再現している。二つ目が「遺構模型」であり、これには1・3・5・9号墳が該当する。遺構面に保護盛土を施しているのは前者と同じだが、ここではその上から土色系透水性舗装材を施しており、墳頂平坦面では埋葬施設を再現している。私達は実際に9号墳の上に登り、間近で観察することができた。復元であるとはいえ、当時の墳墓が存在していたことを体感できた。

見学の最後では、王山40号墓を観察した。同墳墓は丹南地域では最大級の方形周溝墓であり、弥生中期のものであったとされる。当墳墓は、丘陵の一番高いと

ころに立地しており、上に登ると周囲に造られた他の古墳を見渡すことができた。こうした点から、この場所に埋葬された人物がいかに強大な力を持っていたかを実感した。

今回の研修旅行を通じて、実際に自分で現地を訪れて観察することの重要性を改めて学んだ。今後、様々な学習に取り組む上で、論文を読んだりする機会が多々あると思う。しかし、そうした知識はあくまでも第三者が調査し、考えたものであることを念頭に置いて、可能な限り自分の目で見て判断するようにしたい。

#### 【参考文献】

- ・王山古墳群一めぐりのまちさばえ 鯖江市(city.sabaefukui.jp) (最終閲覧日2024年9月22日)
- ・国指定文化財等データベース(bunka.go.jp) (最終閲覧日2024年9月22日)



王山古墳群 墳墓

# 2024年度 文化遺産学専攻夏期研修旅行 報告書

発行 2025年2月6日

編集・刊行 龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

〒600-2368 京都市下京区七条大宮東入大工町125-1